

緋弾のアリア CODE:J

Bligh\_Drunk

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

日々凶悪化する犯罪に対して、対抗する為に生み出された「武偵」。

彼もまた、その武偵の1人。

しかし、彼は他の者には無い秘密がある。それは、彼が今居る世界に生まれた存在では無かったという事！

2度目の生を歩み行く彼は、その道の先に何を見るか？

逃げることは許されない、死ぬことも許されない！ 不可能を可能にし、地獄の底から希望を掴め！

ALERT!!! 緊急警報！ 緊急警報！ 緊急警報！ 緊急警報！ 緊急警報！  
ALERT!!!

本作は：：

- ・ 原作未読故の差異，食い違い
  - ・ クソザコ文章力
  - ・ 例のアレ系ネタ
  - ・ 独自解釈
  - ・ 俺様理論
  - ・ 色んな人が愛用する安定のご都合主義
  - ・ 意味不明文章
- が、あります！

逃げるなら今の内だぜ？

それでも進む命知らず、歓迎するぞ。このイカれた世界へ：：

ようこそ！

# 目次

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 情報リスト               | 1   |
| Case:東京             |     |
| File. 1 Hello World | 5   |
| File. 2 訪れた陰        | 11  |
| File. 3 悪魔の導き       | 16  |
| File. 4 緊急任務        | 23  |
| File. 5 教官大作戦       | 32  |
| File. 6 歯車          | 41  |
| File. 7 有毒の花        | 50  |
| File. 8 Fly Diver   |     |
| 4th                 | 154 |
| Case:ハワイ            | 138 |
| File. 9 雲の中の翼       | 75  |
| File. 10 凍てつく悲壮     |     |
| File. 11 ダークホース     | 86  |
| File. 12 刺客         | 99  |
| File. 13 血の宿命       | 124 |
| File. 14 Judgment   | 114 |
| File. 15 Summers    | 1   |

|     |         |          |          |
|-----|---------|----------|----------|
| d   |         |          |          |
|     | File.   | File.    | Case:Out |
|     | $\beta$ | $\alpha$ | Side     |
|     | Steel   | 男達の戦場    |          |
|     | File    |          |          |
| 182 | 1       | 166      |          |



# 情報リスト

J・マックス（ジェイ） 東京武偵高校 2年

諜報科 「C」

ひよんなことから元の世界で謎の女（？）に殺された。（当時23）

その後、どういう訳か神様という存在と話し、今回の件は不慮の事故だと告げられ2度目の人生を与えられた。

生前は純日本人だが、転生後はアメリカ出身の日系アメリカ人（黒短髪）。

アメリカの育成機関から上がる際、そこからの推薦を受け東京の武偵高校に渡って来た。

備わった能力としては、基本何でもできる万能性（器用貧乏）、悪運が強く、瀕死の状態になっても簡単には死なない。生前よりもかなり身体能力が高く、自身の思った通りに動ける反応速度もある。ただし、それらと同等の不運がつきまとう。

武偵としては何がどうしてそうなったのか、一部を除き全科「C」評価。

諜報科でありながら、他の武偵からの支援要請が頻々に入る為、休日返上になることもある。

一部では、超偵にも引けを取らない生命力から”不死身の男”と噂されている。(R PG-7の直撃を受けても無事だったらしいが詳細不明)

生前と同じくありきたりな日々を願っているが、その意思に反し次から次へと厄介事(特に女)に巻き込まれる。

基本、自身の利益を考えるタイプなのだが、なんだかんだ言って断れない性な為、その度に不屈の闘志で乗り切ってきた。状況が悪くなると口も悪くなる。恋愛には全く興味無し。

武器はほぼ全て自ら専用カスタムしている。中でも、アンチマテリアルウエポンが多い。我流コンバットアーツ使い。初めて使う武器・兵器その他も問題なく使いこなせるだけでなく、あらゆる物を駆使して戦える。

通常武装は、連射型カスタムデザートイーグル、ヒートナイフ。

モデル：ダイ・ハード ジョン・マクレーン

柴田 龍 東京武偵高校 2年

探偵科 「B」

ジェイの数少ない友人の1人。



知り合ったのは、1年のカルテットの際チームを組んでから。

私服にいつもチノ・パンツ（防弾）を穿いてくることから、ついたあだ名が”チノパン”。

探偵科ながら戦闘技術はそれなりに高く、基本前衛に立つても問題ない。主に捜査依頼をこなし、その実績は結構いい方だったりする。

どこまでも一直線過ぎて空回りすることも多いが、聞き分けは良い。

空手5段。武装は、ベレッタM92（サムライ・エッジモデル）、スタントンファ。

モデル：太陽にほえろ ジーパンこと柴田 純

米村 伝悟郎 東京武偵高校 2年

装備科 「B」

ジェイの友人にして最も信頼しているウエポンバイヤー。

柴田と同じくカルテットで組んだ際に知り合う。チームとしては、後方での支援要員だった。

実験好きがこうじて性能テストと称しては怪しげな実験を繰り返して失敗を量産しているが、装備科としては要望通り確実に仕事をこなす。その学の高さから、小中学校

での講演依頼も少なくなく、「でんごろう先生」が板についている。

他の装備科と比べても、重火器類を多く扱っている。爆発物の知識に関しても詳しい。

基本的に人がいいのだが、性格に似つかない行動のヤバさが見え隠れしている。(これが無ければ本来「A」だったかもしれない)

武装は、グロック18C, 自作ツールナイフ, UZ I-800 (でんごろう作) × 2。  
モデル：でんじろう先生 (米村 でんじろう)

Case: 東京

File. 1 Hello World

「……ふつ、ついにできたぜ、ビッグ・ジョン！」

家中にその声の木霊する。それが歓喜の声だと言うことは分かった。

「不要な備品を融通してくれた奴ら、先生方には感謝しないとな。この3Dプリンタを作るのにどれ程苦労したことか……」

男は装置の前に立ち、感慨に浸っている。部屋の周りには、今しがた作られた物と同じような兵器（メタルスラッグ）、超兵器（鋼鉄の咆哮）、ゴリアック（サルゲッチュ）などが大量に置かれていることから、彼の趣味部屋であると思われる。

そんな時、彼の電話がこの時間を断ち切るように鳴り響く。男は嫌々ながらも携帯を手を取った。

『ジェイ、悪いが手伝ってくれないか？ 今お前しか頼れる奴がいらないんだ！』

「お前いきなり何言ってるんだ？ 俺は今休暇中だ、分かってるだろ？」

『頼むよ！ 何なら報酬出してもいいから！』

「まったく、状況はどうなってる？ 場所はっ！」

そう言つて男は、制服と思われるものに瞬時に着替えると、停めてあつた大型バイクに跨り家を後にする。

さあ、今日も仕事の始まりだ。

よう、俺はJ・マックス。突然ですまないが、お前らには俺のことについて幾つか知つていて欲しいんだ。OK？

それじゃ、まず俺は「この世界の人間じゃ無い。世間一般で言う所の「転生者」つてやつだ。

当時、俺は仕事帰りに金曜日と言うこともあつて習慣となつていたゲーム店漁りをしていた。

日が暮れて帰路につこうとしていた一本道。どうも俺の感覚がこの辺の空気が妙だと周りを見ると、近くに誰かがいるのが見えた。姿自体はよく見えず、体格の細さから

女であろうことは分かったんだが、全身黒一色のそいつは包丁位のデカイナイフを持っていやがった。

直感的に危険を察知した俺は持ち前の反応速度ですぐさまその女から離れていったが……

……嘘だろお？ あの女、俺より断然速いじゃねえか……

もうやばいと思ひ、咄嗟に避けようとしたが間に合わず、組みつこうとしたが常人以上の力で圧倒された。

ナイフは見事に俺の心臓を貫き、そのままおつ死んじまった。

んじやなんで俺は転生したかって？ 俺もあの時の事は詳しく憶えてないんだが……

俺は神様って存在と話をしたのさ。

そいつの話では、今回起こった事象は本来ありえない筈のことで、俺はそれに巻き込まれてしまったらしい。

そこで、俺に第2の人生を与えてくれるという話になったのだ。

内容としては、俺はある世界に送られる。で、その世界でも簡単に死なないように”

俺に相応しい能力”をくれるらしい……

……いや、俺に相応しい能力って何だよとか、そもそも”ある世界”ってどこだよとか、つーかそんな力が必要な程やばい所なのかとか色々思うところはあったが、何故

か後半からノリノリになった神様にさっさと送り出されてしまった。

・ ・ ・ あのジジイめ：

まあ、能力に関する知識はちゃんと知っていることになってたから良かった。

俺の能力は、

・ 何でもできる（勉強、戦闘、家事などなどやれる範囲ほぼ全て）

・ 身体能力が高い（以前は凡人レベル）

・ 悪運が強い、ちよつとやそつとのことじゃ死にはしない

・ それらと同等に不運がついてまわる。

・ ・ ・ それってどんなダイ・ハ○ド？ つと思つた。実際、転生してから今まで碌な

事（特に女）が無かつた。

それで、俺の送られた世界についてだが：： 俺はこの世界で”武偵”と呼ばれる存

在としてアメリカから渡つて来たことになっている。

・ ・ ・ どつかで聞いたことあつたんだよなあ：： いや、ノベルとアニメがあつた筈

なんだが、映像をチラつと見ただけで知識は：： ほぼ0だったな！

日本本土に渡つて来て1年、何度か死にそうになりながらも何とかやってきた。

割に合わねえんだよ、便利屋の便利屋とかよお：： まあ、こんな感じで今までやつ

てきた訳だ。（過程すつ飛ばし）

かなり雑な説明だったが、改めてよろしく頼む。

突然だが！ 俺は2年になり新たなクラスへと向かっている。・・・2年になっても現状は変わりそうもねえなあ・・・

なんか自転車ジャックなるものが発生していたみたいだが、俺が駆り出される必要が無かったみたいで安心したぜ。

俺のクラスはC。しかし、知り合いは・・・ いたわ・・・ あいつ等が・・・

「いよお！ また、お前と共に過ごせること、光栄に思うぜ！」

「さて、今年はどんな実験ができるかねえ・・・」

「相も変わらずマイペースだなお前ら。まあ、よろしく頼む。」

1年の頃の仕事仲間であり友である、「柴田 龍」、「米村 伝悟郎」その2人だ。

こいつ等のことはまたとして、俺はさっさと席に着いた。この面子でやっていく訳か。

・・・つと、奥の方からいきなり銃声が。それに続いてここまで聞こえる位の大声まですた。俺の知る限り、心当たりの無い声色だと思う。

・・・そういやあ、2年に転入してくる奴がいたっけな。しかも、声から察するに女。

室内でぶつ放した挙句、風穴開けるとか、おお怖え…… あいつとは、絶対関わらないでおこう。

しかし、悲しきかな彼の運命はまるで操作でもされたかの如く、今後巻き起こる様々な波乱の事件に巻き込まれてしまう。

果たして、J・マックスの運命は如何に……！



## File. 2 訪れた陰

よう、お前ら。俺の名はJ・マックス、つてこりや前にも言ったよな。

今日は、2年になっての登校初日。事件はあったが、それ以降は特に何事も無く終わることができた。

今は、既に家に帰宅してくつろいでいる。

俺は住居が寮ではなく武偵校からそれ程遠くない一戸建て、中学期頃に色々やってたこともあり金銭に余裕があったから一括で買った。

他より安い物件だったしな。

・・・勿論、そこまでの大金があったのはそれだけの理由じゃない。

俺の両親は、小学4年頃にどちらも原因不明の病でこの世を去っている。引き取り手は居なかったが、前世の世渡り術を駆使して1人でも何とかやってこれた。

その結果が現在の俺な訳だが、記憶があっても実際にこの世界を経験し始めたのはアメリカから渡ってから。

一度くらいは、両親と話くらいしておきたかった、かもな…… そう思っていた矢先のことだ。

「ん？ 誰だ、こんな夜中に…。」

玄関の呼び鈴が鳴った。誰か来たみたいだが、宅配の予定なんかは無かった筈。一体誰だと思ひ、モニターに向かった。

「どちら様ですかい、つとなんだ遠山じゃねえか。」

「すまないジエイ、今だけお前のところに匿つてくれないか？」

「こいつは一体何を言い出してやがんだ？」

「は？ お前は寮があるのになんでわざわざ…。」

「部屋を追い出された。あの転校してきた、アリアにだ。」

アリア： 確か神崎だったか？ そうか、こいつが転校生なのか。

「で？ そいつは何だつて、男子寮の一室を占拠するまでに至つたよ？」

「・・・奴隷。」

「んあ？」

「奴隷になれと言われた。要は、俺とパートナーを組めつて話だ。」

奴隷つて… それマジかと言いたくなる sondern 発言だな。どうも聞く限りじや、かなり厄介な性格をしているらしい。

お前も面倒な奴に目を付けられたな… 待てよ？

「神崎はお前とは初対面の筈なのに、なんでお前を指名してきた？ あるとしたら」ア

レ”を知っていることぐらいだと思いが……」

「あー、その…… だな……」

「見られたのか。」

「どうやら、遠山はあの”力”を神崎に見られてしまったようだ。」

「だが、何時だ？ そうだとしてもつい最近だろ。」

「……お前、今朝の事件の事は知ってるだろ？」

「ああ、まあな。」

「あれの被害者、俺なんだよ……」

……お前だったのか…… 遠山が話した経緯で大体は理解した。

神崎の助けで爆弾から逃れたはいいが、倉庫内に追い詰められた所、不慮の事故ではあつたが”アレ”を発現して危機を脱した。

しかし、その際に神崎に思いつ切り見られてしまい今に至るといわけか。ただ、今は”見られただけ”らしいが。

しかも神崎の性格から推測するに、そう簡単に引きはしないだろうな。本当に不憫な奴だよお前は……

「たく…… その様子じゃ飯もまだだろ。入れ、丁度今から飯だ。」

せめて知人位からは救いの手を出してやらないとな。そう思い立った俺は、家に遠山

を招き入れた。

地味にこういう時、何でもできるつつうのは便利だとそう思う。

「感謝する…。」

「…気にするな。借りもあるしな。」

遠山には何度か事務処理なんかの手伝いをしてもらったからな。これでチャラに来るなら安いもんだぜ。

「それで、どうする。泊っていくのか？」

「いや、この後戻るよ。流石に、このままにはしておけないしな。それに、あそこは俺の部屋だぞ？」

「ああ…：　　そうか…：　　まあ、上手くやれ。」

この後に、遠山にまたしても災難が降りかかることになるのだが俺が知る筈も無い。

しかし、遠山の奴から聞いて俺も神崎について少しデータベースを漁ってみたが、まさかSランク武偵だとはな。欧州方面ではかなり有名な上に凄まじい実績、家柄も相まって真正正銘のエリートって感じだな。

けど、神崎はなんだってここに渡って来たんだろうか…：

経歴からしても、理由らしきものは… ありとしたり彼女の親に関係することか。  
…まあ、そこは俺が関わることじゃないだろう。さっさと片付けしたら、風呂入って寝よう。

何故か何もしてねえのに、今日は疲れた。あ、明日のスケジュールも考えとかないな。

それにしても… 遠山は今回の事件の主犯は模倣犯か何かだと言っていたが、果たして本当にそうだろうか？

情報から見た計画性の高さ、とてもじゃないが唯の模倣犯だとは思えない。

… 深入りする気は無いが… 武偵殺し、か…

「ふむふむ、やつぱりジエイは、こつち側」に引き入れるべきかなあ。 よーし！ 近々仕掛けちやうぞー！」

この時は、既に自身も「物語」に巻き込まれてるなんて分かる筈も無かった。

知らなかつたんだ… 俺の知らぬところで、あれ程に面倒なことが起ころうとして

たとは…

## File. 3 悪魔の導き

「うーむ：： こいつにするか。」

さて、今俺は武偵校にて依頼の拝見中だ。武偵高の専門科目、俺は諜報科だが、唯その科目を受けるだけでは駄目だ。民間などから寄せられる依頼をこなしていくことで、必要な単位を揃えるのも手だ。

まあ、そもそも俺は関わるつもりも無い事件に巻き込まれるわ、支援に呼ばれるわけほとんど2年分の単位を揃えてしまってるから、依頼を受ける意味はあまり無い。

だが、まあ：： その、なんだ。持ってる武器の都合上、金がな：：

そんな訳で、なるべく報酬のいい俺にとって楽な依頼を選んでいた。今回は、ある会社の経理プログラムの作成。これでも、前世では専門校で電子科専攻。Java, C言語はお手の物だ。

「ここを表示：： そんで、こいつの結果をここに反映：： こんなもんか？ 後は、コメント書けばいいだろ。」

プログラムを組むこと自体はそれ程時間は掛からなかった。後は、こいつを先方に送信して：： おかしいな：： 電波が飛ばない。

こんな事あるのか？ 無線機能が故障したのか？

「仕方ない、直接行った方が早いな。」

修理するかどうかは後にして、さっさと依頼人のところに行って任務を終わらせようと思ひ、俺はバイクを走らせた。

この時、俺のノートパソコンをよく調べておけば、その異常に気づけたかもしれない。かつたんだがな…

「いやあ、助かったよ。こういう事ができる人もいるんだね。」

「大した事じゃありませんよ。メンテナンスの方は大丈夫ですか？」

「ええ、担当の者を用意していますので問題ありません。とにかく、今回はありがとうございます。ございました。」

「ええ。それでは、失礼いたします。」

特に何も問題無く依頼は完遂した。これで10万なんだから、経験者には割りが良

いつてもんだ。

さて、やる事も無いし戻るとするか…

ん？ 電話？

『やつほー！ ジェイ、元氣してるー？』

なんだ、峰嬢か…

峰 理子はよく依頼（強制）を頼まれる関係で、いちいち会うのは面倒臭いということで、連絡先を交換”させられた”。

普段なら血相を変えてくる彼女の取り巻きは、何故かこの時だけは全員が納得した様子だった。何でだよ。

という訳で、同学でもあり依頼人でもある、って感じの奴だ。今のところは…

「峰 理子、今回は一体どんな罰ゲームを持って来た？」

俺はもう、それは素直に直球ジャイロボールをあゝの現代のかぐや姫に向かって全力投球した。

いつもいつも、あいつの持つてくる無茶振りには悩まされている。

やれバツクを作つてほしい、やれ女子会に付いて来てほしいと碌な事があつた試しが無い。

『酷いじゃんその言い方！ それに、今回はそういう事じゃないんだよ？』

「マジか？ お前からそんな答えが返つてくるとは、正直驚きだ。なら、何だ？」

『別にー？ ただ声を聞きたかつただけ。』



「なんだそりや… もういいか？ 依頼の報告に行かないといけねえんだが。」

『もう、せつかちだなあ。そんなんじや、1人でお墓を用意しなくちゃいけなくなるぞ？』

「やかましい、じゃあな。」

全く何だつたんだあいつは… とりあえず戻らねーと。

「…?」

しかし、俺は見つけてしまった。河原沿いの対岸から、こちらに向かつて来る”何か”を…

「あれ、は… ドローンか？」

それは、若干既存の物よりも大きめの飛行ドローン。

そしてそいつには、本来あつてはならない物が取り付けてあつた。

「なっ！ ステインガーだど!」

しかも、そいつは真つ直ぐこちらへ向かつてるようだ。

導き出される答えは…

「狙いは、俺?」

即座に、エンジンを吹かしフルスロットルで引き離しかかる。

だが、ドローンもそれに追隨してくる。完全にあれは俺を狙つていやがるぞ！

「くそっ！」

まさか、こんな変則的追っ駆けっこをする羽目になるなんざ想像できるかよ。

民間への被害を考えれば、住宅街へは行けねえ。何とかこのエリアでどうにかしなけりやならない。

チラつと見た感じ、あのタイプは熱感知誘導型。回避は絶望的と言える。だが、この場所なら…

「賭けに出るか…」

もう何度目かも分からない生死を賭けた大博打。やるしかないんだがな！

俺は勢い良く河川敷の方へと飛び出した。おそらく、狙いをつけるなら、着地する一瞬。動きが鈍るその時！

予想通り、ステインガードローンは河川敷に着地した俺に向けて撃ってきた。

川沿いギリギリに寄って、次の瞬間！

「ふっ！ っっだ！」

俺は川へと飛びのき、その瞬間に取り出したデザートイーグルでローンの羽を、撃ち抜いた！

そのままの体勢で俺は川の中へダイブ、バイクはオートドライブ機能で離れていく。

目標を失ったミサイルが、軌道を保ったまま俺が落ちた地点を通り過ぎ、着水。

馬鹿デカイ水柱を立て、水しぶきが辺りを濡らす。

「……………」

静寂：… 何とも言えない空気の中ただ一人、俺だけが佇んでいた。

例のドローンは、内部に爆弾でも仕掛けてあったのかボロボロに焼け焦げている。証  
拠も消えた、か：…

…あれは、俺を殺しにきているようにしか見えなかった。武偵殺し：… まさか、  
な：…

妙な違和感も感じられたが、その真意も分からず。結局、事件として処理はしなかつ  
たが、その日はそれ以上何かが起こることは無かった。

「アツハハ！ やっぱ、生き残った！ ジェイの生命力はホント化け物レベルだね♪」

「大袈裟ね：… たかが「C」ランクの武偵如きにそれ程価値があるの？」

「あんたも意外と見る目無いねー。ジェイだったらー、その自慢の毒でも死なないかも  
よっ？」

「不愉快ね：… 私は、私の目的を果たすだけ。あなたは何を考えているのかしら？」

「・・・まあ見ている。きつと、面白い事になるからな。」

不穏な影は、既に喉元まで迫っていた。それは、本来のターゲットであったアリアだけではなく、ジエイにも向けられていた。

「待っているオルメス、ジエイ・・・ ふ、ふふふ。」

逃れえぬ運命とは、どれ程までに彼を追い詰めるのか。それこそ、神のみぞ知るのだろうか・・・

## File. 4 緊急任務

清々しい朝だ。

日の光を全身に浴びて、俺ご自慢の愛車を走らせる。

この極限改造を施した大型バイク「スレイプニル」は、アメリカ在住の時から相棒。自ら組んだオートドライブ機能はもちろん、規定ギリギリの武装・装甲がある。

にもかかわらず、車体はスラッとしていて黒カラーも相まって非常にスタイリッシュ。

最高の日に、最高の愛車で走り抜ける。今日は良い日になりそうだ。

・・・なんて、すぐその考えは改めなければならなくなつた。

「銀行強盗？」

『そうだ。今朝、通達があつて調べてみたんだが、どうやら犯人は今現在逃走中だ。』  
朝っぱらから強盗とは、元氣な奴らだな本当に。

「柴田、犯人共の現在位置は分かっているんだろ？」

『勿論だ。今奴らは、首都圏から離れハイウェイに向かってる。』

・・・？ もしかすると、この近くか？

「柴田、今俺のいる場所が〇〇エリアなんだが？」

『!! まさにそこだ！ 敵は目と鼻の先だぞっ！』

後ろを見るとどうだろうか、けたましいサイレン音と共に大型トラックとパトカーが見えてきた。

俺は真っ先に、スコープで犯人共の確認をする。

「前に2人、見えてない奴らも含めて5人。軽武装だな・・・ 防具は無し、他の奴も同じだろう。注意すべきは、サブマシンガンと未確認の爆弾か。」

冷静に物事を見るのは諜報科の十八番。俺は強襲科じゃねえから、やたらに突っ込んだりはしない。

「やっ・・・」

いよいよもって追跡・・・

「そのアンタ！ ちょっと待ちなさいっ！」

・・・っついていきなり何だお前!? つーか、かなり聞き覚えのある声なんだが・・・

「アンタ、武偵ね？ あのトラックを追うわ、乗せなさい。」

「いやいや、何だおま…!!？」

「げえ!? 神崎!!! まさか、こいつだったとは… (今更) 落ち着け、俺。奴隷とか言われた奴よりはまだマシな筈だ。」

へタに出て怒りを買ったら、俺の”不運「S」”が発動してしまう!

「ほら、ボサつとしない! 時間は待つてはくれない、急いでっ!」

「クソオ! 振り落とされんなよ!?!」

どうやらまだ大丈夫のようだ… このタイプは、いつ噴火するか分からない。

とは言え強襲科が絡んでる以上、これ以上の遅延行為は蘭豹先生が黙っていない。

『行動に疾くあれ』、神崎のメットは無いが気にせず追跡開始だ。

舞台をハイウェイに移しても、なお両者の攻防は続いている。

「ふっははは! 死いねえええ!!」

トラックの後ろに群がるパトカーに向け、犯人達は銃を乱射、荷台の中からも撃つてきた。

フロントガラスが割れ、ボンネットが吹っ飛ぶ。直後に、後続を巻き込んで大クラッ

シユが起こつた。

「へはは！ ざまあねえぜ！ さあ、このまま逃げ切りだ。．．．ん？ 何だあ!？」

しかし、そのパトカーの山から突然それを飛び越えて1台の黒いバイクが物凄い速さで迫ってくる。

「武偵か!? 撃て撃てえー!」

それが武偵だと気づいた犯人達は、一斉に狙いを集中した。

だが、幾ら撃つてもかすりもしない。少なくとも3人からの銃撃に晒されているにも関わらず、未だ無傷な程には中々のドライビングテクニクだと言えるだろう。

それよりも神崎、メットをしてるとは言え俺の耳元で発砲するのはやめてくれ、割とガチで。

「食らいやがれっ!」

このままではいかんと思つた俺は、渾身の一振りで手榴弾を荷台に投げ込んだ。

「グワアアア!」

「イツデー! 痺れ、うおあああつ!」

どうだ、ショックグレネード威力は! 敵を無力化するのにこれ以上適した物はない。

俺はそのまま荷台の方に接近する。神崎も俺の意図に気づいたのか、俺の肩を踏み台



にして荷台へ飛び移った。

「何だ!? どうなってるんだ!!!」

「こう言うこつた、糞野郎。」

「ぐっほお!」

いつの間にか運転席の位置まで来ていたジエイは、左の窓から強行突入し1人の後頭部に向けて蹴り込み中へ入ってきた。

「無駄な抵抗は止めとけ。」

「ぶ、武偵があ…こ、このトラックには爆弾が積んである！ お、お前らも吹っ飛ぶぞ!」

残る1人は、最後の抵抗と言わんばかりに爆弾のリモコンを出してきた。

このままでは、俺も神崎も他の犯人達も巻き込んでこのハイウェイに特大の花火が放たれるわけだが…

「出来る訳ない。お前も死にたくないだろ?」

「ほざけ! ここまで来て捕まる位なら、1人でも多く巻き添えにしてやるっ!」

「仲間もいるのか?」

「て、てめえら武偵を、道連れに出来るなら、他の奴らも本望だつ!!」  
スイツチが、押された..

..  
..  
..

一瞬の静寂、男は困惑し過ぎて全く意識が追いつかないが、爆弾の反応が無い。  
「・・・ジャミングさせて貰った。そのリモコンは何の意味も無い。」

「へぶっ?!」

最後の1人が沈黙、ジェイがトラックを止めた所で事件は完全に終息した。  
「遠隔式じゃなく、信管と直接つないでおくべきだったな。」

『どうやら、終わったみてえだな。』

「ああ、全く早い内から迷惑極まりねえぜ..」

『違いねえ、”武偵殺し”の模倣犯といい、本当こ最近の事件数は凄いな。』

「後で報告書を作る、お前はいつも通りにしてろ。」

『了解、お疲れさん。』

「……これでいい、後は警察に任せて俺もさっさと退散するか…… 萎えたな、今日  
は帰るか？」

「中々やるじゃない、アンタ。」

「……。」

ああ、そういやあ神崎がいるのをすっかり忘れていた。

どうする？ 下手に何か言って遠山のように“奴隷になりなさい！”なんて言われたら、この一番の最悪な展開だ。

「アンタって強襲科？ だったら結構な実力なんじゃない？」

「俺の所属は諜報科だ、ちなみに強襲科も同じく「C」だ。」

俺はそれだけ答えた。何も、自ら多く語る必要は無い。今の時代、調べようと思えば色々出てくるもんだ。武偵なら、尚更容易な事。

「ふーん、意外ね。アンタの実力なら「A」ランクか「B」ランク位はあると思っただけ。」

「そうかよ……。」

そう言っただけ俺はこの場を離れようとした。もう、一刻も早くこの面倒な空間から1抜けしたかったんだが。

「丁度いいわ。バイクがあることだし、アタシを乗せていきなさい。」  
「んなあつ!？」

唐突に、こいつは俺を自分の足に使おうとしていやがる…。即座に反論しようとしたが、神崎が先にインターセプトオ!

「何か文句ある? 同じ学校に行くだけの事なんだから問題無いでしょ?」  
「ぐっ、分かった…。」

結局は俺が折れる以外選択肢は無かったわけか、人間諦めが肝心、頭を省エネモードにしてバイクを取りに行った。

「そう言えば…。アンタ、名前は?」

「…。答える必要は無いだろ。」

「うっさい! とつとと言わなきや風穴!」

「…。J・マックス、だ…。」

こいつと話すだけでもドツと疲れが出た…。こいつに付き合わされてる遠山は不憫だな、と改めて思ったぜ…。

「ジエイ、か…。」

彼女は、直感的に思った。あいつには、他には無い何かがあると。根拠は無い。唯一の優性遺伝子がそう告げているだけだ。

(動きは悪くない、状況判断も適確。もしかしたら、アタシに合わせられるかも…)

J・マックス、候補に入れてもいいかもね。

「何にせよ、アイツは調べた方がいいわね。」

ちやつかり、遠山のスケープゴートになりかけている俺。当然、俺はその兆候を見出すことはできなかつた…

## File. 5 教官大作戦

「……ハハハか。」

よう、お前ら。今、俺ことJ・マックスは遠山に呼ばれある場所に来た。

要件自体は教えられなかったが、あいつから依頼が来るのが珍しいことだったんで、事情を確かめるべくやってきた訳だが……

「おかしいな…… 場所は合ってる筈だが？」

来てほしいと言われたポイントに来たが、どう見てもこれは、すげえ立派な屋敷だ。

だが、肝心な遠山の姿がどこにも見当たらない。入念に辺りを見回していると、屋敷の方から声が掛かった。

「あつ！ 教官がいらつしやいましたのー！」

……は？ 教官？ つーか、どういう事だ……

「あなたが理子お姉様のおつしやった教官ですね？ 今日1日ではありますが、よろしくお願い致しますの♪」

駄目だ、話が全く見えてこない。とりあえず、俺は呼び出した張本人遠山に超速発信！

「おい、これはどういう事だ。話が違うじゃねえか。」

『しかたなかったんだ。』 何とかしてお前を呼んでくれって、理子に脅されたんだ!』

「ああ、峰嬢の謀略か。..」

『お前に内容を素直に言った所で、応じる筈無かっただろ?』

一理ある。他ならまだしも、1年の、それも女子（ここ重要）の相手をしてくれと言われて、はいそうですかと了承するかと思えば、まずありえない。

..つて、肝心なのはそこじゃねえ!

『ともかく、後は任せる。悪いが、じゃあな!』

あ、あいつ。.. クソオ! 覚えてやがれ。.. なんて思ってたら、見計らったかの

ように理子から電話が。

『おはよー! ジェイ!! 今朝の調子はどう?』

「ああ、そりやあもう。誰かさんのおかげで、絶賛テンションだだ下がりだ。」

普通の男子ならこの状況に不満があるか?.. と思う。だが、数々の災厄（女）を経験してきた俺には分かる。絶対に駄目な奴だ。

何とかしなければ! 無駄だとは分かっているが、一部の望みに賭けネゴシエイト

チャンス!

目の前の男、理子に呼ばれて来た筈の男は何故か呼び出した本人と電話が続いている。

話の内容から、どうも男の方「ジエイ」は事の次第を把握しておらず、それを抗議しているようだ。

「ねえ、あの人で大丈夫なの？」

「大丈夫ですわ、間宮様。理子お姉様の一押しなんですから♪」

「うーん、私にはとてもそうは見えないよ……」

無理もない。その男からは、……何かこう、オーラのものが感じられない。むしろ、哀愁が漂っている。

傍から見ても、アリアの様な存在とは真逆に位置するような印象だ。

「知らないのか、あかり？ あの実業、一部じゃ結構名の知れた「C」ランク武偵だ。」

「「C」ランクなのに有名なの？」

「有名と言う程では無いですが…… 通称、”不死身の男”。これまで幾つかの凶悪犯罪に関わり、致命傷を負っても必ず生還してきた凄い人ですよ？」

実は、あまり知られてはいないが死ぬ確率の高い役割を多く任されているながら、重傷を負ってもいずれも生きて帰ってきた経歴がある。



見た目、黒ジャケット、ズボンにグローブと凄い地味だが…

「やっぱりー、ジェイはー、私よりもアリアの方がいいのかなあ?」

「はあ!? 何故そこで全く関連性の無いあいつの話が出てくるんだ!」

「ええー? だってえー、キー君が自分の代わりに挙げた候補だから?」

あいつ、サラッと俺を巻き込んでやがる。つーか、何でこいつはそれを知ってる!

『とりあえず後はよろしく、マックスマン軍曹! 汚い罵倒で泣かしちゃっても良いよ!!』

…そのネタはどうかと思うし、んなことしたら俺が犯罪者だ。結局、最後まで聞き入れられなかった… いや、知ってたがな!

「はああああああ…」

「あの、大丈夫でしょうか?」

「…いや、気にするな。いつものことだからな。(悟り)」

もう、どうにでもなれの精神の俺。本当、よくやってこれたよな…

「名乗るのが遅れた、俺はJ・マックス。諜報科所属だ。」

「ジェイ教官は、ほぼ全ての学科で「C」ランク。多様に優れ、1対多人数に強いプロのゲリラですよ!」

”プロのゲリラ”：誰が言ったんだ、まったく褒められたもんじゃねえなあ。

「では改めまして、私は島 麒麟！ 中等部でCVR所属ですの。どれ程凄いのか、見せてもらいますわよ？」

「火野 ライカ。強襲科、1年です。糧にさせてもらいますよ、先輩？」

「佐々木 志乃と申します。探偵科の1年です。ご指導お願い致しますね。」

「間宮 あかりです。強襲科、1年… よ、よろしくお願いします！」

1年にインターンの指導をする日が来ようとはな…（しかも女子）ちっ、しかたねえ。

「いつでも始めていいぞ。どうせ、今日限りだ。後で最悪の結果に泣かないよう、全力を出して来い。」

今年の1年も優秀な奴が多いと言うが、こいつ等も中々凄いな。

「周囲の変化に対応できる反応速度があれば、咄嗟の事態にも自然と動ける筈だ。防衛は常に堅めるんじゃない、防ぐ一瞬を見極める。カウンターは確実な時だけを狙え…！」

「…はい、教官！」

「火野は元々身体能力は良いのか、筋がいい。隙を晒し過ぎないようにすれば、更に化けるのは間違いない。」

「はあっ!」

「間合いを詰めるだけなら対処はし易い。より狙い目となる瞬間、フェイントをかまして側面を取るのも1つの手だ。」

「成程.: 分かりました!」

佐々木は、探偵科ながら近接戦はかなりの実力。搦め手を用いたなら、なお一層強くなる筈だ。

「状況を正しく判断したいなら、敵のことだけじゃなく、地形、位置関係、天候、あらゆる観点から見た上で判断できるようにしろ。」

「了解、ですの!」

島の戦術的観点は予想の斜め上なものが多いが、目の付け所は面白い。この先、良い司令塔として機能できるだろう。

「ここまでは特に問題は無い。ここまでは。目下、最大の問題は.:」

「うわあっ!?!」

「.: . . . . .」

間宮、こいつは一体何なんだ? 何もしてねえのにこけるし.:

休憩中にあいつについて調べてみたが、こいつ「E」ランク!? 最低でも「D」位はあると思ってたが、まさか予想よりも下だったとは…:

気になるのはそれだけじゃない。違和感だ。何がかは分からないが、俺はこいつに物凄い違和感を感じている。

「す、すいません! 私にはアドバイスとかないんですか?」

「・・・悪い、俺から教えられる事は無さそうだ。」

「え、ええー!?!」

事実そうなんだからしかたない。こいつは根本的に俺とは異なる奴だ。しかも、今のこいつは何かが違う。

そいつに俺が何か教えた所で無駄だ。

「お前らも覚えておけ。これは、あくまで俺の主観から見たものだ。似せようとはせず、参考に留めておけ。」

結局、今日1日は各々が伸ばす分野の強化と俺との実戦をやって終わった。

「今回のことが役に立つかどうかは、俺には分からない。後は、お前ら次第だ。」

「「ありがとうございました!」」

ま、やるだけのこととはやったつもりだ。ここから先は、あいつ等が何とかするしか無

い。

「そんなじゃ、とつとと消えますかね。」

「待ってください！」

しかし、間宮の奴はまだ納得した感じでは無いらしい。

「間宮、俺はお前に教えてやれることは無い。ここからは、お前自身が決めることだ。」

「そんなこと言われても・・・ 私が決めた所で何も・・・」

「信じろっつ!!!」

言葉を遮るように、強くこの場にいる誰にも聞こえるように俺は言った。

「人間、所詮は何処までいっても人間だ。例外はいるが・・・ 1人では何も出来ないか

らと、甘んじるのは真の臆病者だ。自分すら信じられずに、何を信じる?」

それは、生前の後悔を知る俺だからこそ、言えたことなのかもしれない。

「お前の解を貫き通せ・・・それからだ。」

「・・・! は、はいっ!」

その後に行われたカルテットの結果がどうだったのかは知らんが、峰嬢から彼女らの勝利と間宮の「D」ランク昇格という名目でメール(いつの間にかアドレス知られてる)で送られてきた。

何だやればできるじゃねえか、と俺はその時素直に感心していた。

こう言う奴らが世界を作って行くんだらうと、ジエイ自身は思っていたが、既に自分が世界を構築する者の一人であったことに、彼は気づいていないようだ。

「そういやあ、俺にしては珍しく今日まで何事も無く過ごせた。・・・無駄に運を使つた気がするなあ・・・」

## File. 6 歯車

怪しい雲行きが続く東京の一角、俺は多人数周辺警戒任務を受け、柴田・でんごろろと共にボックススカーで移動していた。

「最近、武偵を狙った爆弾事件が多いな、つとー！」

「・・・ああ、そうだな。」

「一般校の間でも噂になっている。つい先日、講演に行つた高校では東京都内の何処かに爆弾魔が今も隠れてるってな。」

「随分、目立ちたがりな奴だな！ つと・・・」

「そいつ、打ち消し。」

「んなっ!?!」

「さらに、ライブラリから20枚捨てろ。」

「んおおおおおっ！」

「追加で10枚、フィニッシュだな。」

「またか！ 畜生!!」

いや、仕事中はしっかりやれやお前ら。俺でも、プライベートとははっきり分けてん

だぞ。

まあ、柴田の言う事にも一理ある。・・・確かに、この犯人は悪目立ちし過ぎに思える。

俺なら、無駄に自らを誇示するようなことはしない。この犯人、何かの意図があるのかもしれないが、俺には今の所不明だ。

いずれにせよ、その時は刻一刻と迫っていた訳だ。とんでもなくド派手なショーの開催が、な・・・

翌日、早朝5時頃に発生した人質立て籠もり事件の支援連絡で叩き起こされた俺は、現場に着くや早々に犯人を逮捕した。

まあ、簡単な事だ。相手は1人、武器は刃物のみ。これを考えれば、危惧する点是人質の無事だけだ。

古典的な策で、自身のいる位置から逆方向側に物音を鳴らす、意識がそこへ集中した



わずかな隙を突き、一気に取り押さえた。

ま、これ位は造作もないことだ。だが、犯人の身柄を拘束していた時にきた非通知電話により、物語は大きく動き出した。

『・・・マックスさんですか？』

「その声は・・・ レキ、か・・・？」

レキ・・・ 狙撃科 「S」ランク武偵で、他の武偵より頭一つ抜きん出た才を持つ。

以前、1度だけ共に任務につく機会があったが、あれは正しく異次元の技量だ。

実の所、同じCクラスにいる訳だがこうして会話したことは任務以外ではほとんど無い。

そんな奴がいきなり、しかも知らねえ筈の俺のプライベート番号にかけてきたんだから、驚きもするわけだ。

「だが、一体何用でお前が？」

『手短に話しますと、ヘリのパイロットをお願いしたいと思っています。』

「何故に？」

『・・・今日、武偵校行きのバスの1つが、何者かによって爆弾を仕掛けられジャックされました。』

「バスジャックだとっ！」

「いだだだだだあつ!」

俺は思わず拘束していた腕を折りそうになった。どうやら、任務の最中に情報が更新されて、それに気づけなかったようだ。

どうも、爆弾が仕掛けられたのは7：58男子寮を出るバスだ。確か、あれは遠山達に乗っていた奴じゃないか？

『現在、アリアさんとそのバスに乗っていないなかったキンジさんが事件に当たっています。』

「・・・なるほど、だが何故俺なんだ？」

『今、近くにヘリを操縦出来る武偵がいません。そこで、マックスさんに連絡しました。』

おい、だから何故そこで俺の名が出てくるんだ。確かに俺は、ドライバー・パイロットのマスターライセンスを一応持つてはいるが・・・

『もしもの時に頼れと、クライアントのアリアさんから番号を教えられたので。』

「あ・・・ あ?」

あ、あいつ・・・ いつの間に、俺のプライベート番号を・・・ 峰嬢といい、個人情報漏出し過ぎだろ、管理はどうなってんだ。

だが、この際それは後回しだ。今は、目の前の事件が最優先。

『仲間を信じ、仲間を助けよ』、俺には到底不釣り合いなことだが・・・

「……10分で追いつく、ランデブーポイントで待機してろ。」

『……了解です。』

後輩に偉そうなこと言った手前、何もせずってわけにはいかんしな！

状況はあまり良くは無いようだ。

現時点で、バスは人工島を出るコースに向かっているやがる。

ついさつき、レインボーブリッジ直結のトンネルへ入って行くのを監視カメラ記録で確認している。

ここら辺も、諜報科である俺ならではのやり方だ。何事も、常に情報の有無で変わってくるわけだからな。

しかし、こうなるとますます神崎と遠山に何とかしてもらえない。

事件発生から数時間、おそらくバスには多数の負傷者がいる可能性がある。

加えてバスの行き先、橋を越えた先の都市部で爆発なんてことがあるものなら、その被害は計り知れない。

何としても、あの橋を越える前に止めねえといかん！

バスのGPSはトンネルの出口に差し掛かった。まだ、解体出来てねえのか!?

「見えたっ！」

そのバスを、漸くと目視で捉えることができた。かなりの速度で走ってやがる。

このまま行けば、数十分後には橋を渡り切る。それまでが勝負だ。

ん？ あそこの屋根の上にいるのは、遠山か！ 神崎もいるが、負傷してるのか!?

マズいな…。まだ、爆弾の位置がはつきりしてねえのに…。

だが待て、よく見ろ、何故あいつ等はわざわざ車外に出ている？

車内に爆弾が仕掛けてあるなら、解体に時間を掛ける程のことには早々ならない筈。

…。車外に爆弾があるとすれば？

機体を横につけ、並走しながらさかさず赤外線バイザーで車体を見る！

「あれか…！」

やはりか、車体の下、とんでもなくドデカイ爆弾が。あんなものが、起爆すれば被害の大きさは…。最悪なことだけは確かだ。

だが、どうする!?! 今から解体するにしても間に合うかどうか怪しい…。

そもそも、今の俺がどうこう出来るのか…。

「……。」

何だ？ レキが無言で狙撃体勢に…… あいつ、まさかやる気か？

……いや、もうあいつに任せる他は無い。なら、俺は俺のやるべきことをやるだけだ！

目標に対する位置取り、射角を考えても、かなりギリギリの高度で機体を垂直に保たなければならぬ。

すげえ難度のテクニックだ、ヘタしたら俺らが先にお陀仏だぞ！

しかし、俺もここぞという時に幸運が巡ってくる。やってやれないことは無い！

「行けえっ！」

「……私は…… 1発の銃弾……」

放たれた弾丸は、一寸違わぬコースを描き、欄干の間を見事に抜け命中、連結金具をぶち抜いた！

直後、爆弾が橋から落下、馬鹿デカイ水柱が立つ。……終わったな。

「今回は助かりました。」

「どうってことは無い、神崎のいいように使われたと思うと不服だがな。」

ヘリポートにて降り立った俺は、乗せてきた負傷者達が運ばれていくのを見ながらそ

んな話をしていた。

今回はかなりの負傷者が出た、だが一見すればよくここまで被害を最小限に出来たとも言える。

世間の武偵への評価はそれ程いいものではない。それこそ、遠山のあの件にしてもそうだった。俺らがどうなろうと世間様はどうだっていいわけだ。この件、しくじっていたらどうなっていたことか…

所詮は使い勝手のいい駒か…

「…」

「? 何だ、行かないのか?」

「また、連絡すると思いますので…」

…なんだろうな… 遠山程ではないが、峰嬢といい神崎といい面倒事に突っ込んでいってやる気がするぞ…

いや! そうじゃないと思いたい!! …そうだよな?

ところで話は変わるが、この爆弾事件の手口、一連の武偵殺し模倣犯の件と同じことを考えると同一犯か?

だが、単に武偵だけを狙った犯行なら何故猶予を与えるような仕掛けをする必要があ

る？

俺にはそれだけがどうしても分からなかった。

そして、その真意こそが犯人の最大の目的であったと気づかされたのは、高度10000mの上空においてだったのは少し先の話だ。

## File. 7 有毒の花

バスジャック事件から翌日、武偵の何人かが周辺の警戒につくことになった。俺もその1人だ。

「こんな処を警戒する必要があるか？」

だが、いくらなんでも人工島の末端にあるコンビナートエリアまで行く必要は無いと思うのだが…

しかし、教務科の指示である以上しかたない。

「まあだ止みそうにないか… こりゃあ夜まで降るか？」

昨日の夜辺りから降り続く雨が、大型倉庫の屋根を叩く。

まだ真昼間だが、日が当たらない為に暗闇は所々にできている。

それ程露骨に構える必要も無いと思うが、一応ヘヴィマシンガンとジャイアントショットガン「S」を持って重武装をしている。

ガンライトを照らしながら倉庫を見て回るが、人影は無し… 当然だがな。居たらそいつは、間違いなく不審者だ。

唯々外の雨音だけが、内部に響いていた。



「遠山なんかがともかくとして、「C」の俺に矛先が向くことなんかねえだろ…」

【そうとも限らないわよ?】

!! ……いきなり出てきやがった、気配すら感じなかったぞ… 見た感じ中学生

位かの奴が暗闇から姿を現した、何者だこいつは?

「こんなところで、何してんだ?」

「そうね… 待望の獲物を目前にしての余興、と言ったところかしら。」

「…話が見えないな、まさか”武偵殺し”じゃないだろうな?」

「その答えを知るには、貴方自身の力を示さなければならぬ。」

「何のことだ…」

「わざわざ隠す必要は無いわ、J・マックス。”伊・U”は全てを知っている。貴方に興味は無いけど、あの子が狙っているのが少し気になってね。」

”イ・ウー”、だと?」

「只事じゃないな。”イ・ウー”… 聞いたこともないな。」

だが、少なくともこいつ以外に1人以上仲間がいることから、人名もしくは組織の事を指していると考えられる。

それよりも、”力を示せ”とはつまり…

「随分と物騒な話だな。いずれにせよ、話を聞く必要ありだし、避けられそうも無いな

「？」

「最初から結果は見えているのだけど……」

少しは楽しませて頂戴？ ”モルモツトさ

「知ったような口で呼ぶな！」

とは言え、どうしたもんか…… 相手は一見丸腰に見える、だが仕込みを警戒するのは当然だろう。なら、こちらの火力で制圧に……

「ぐっ!？」

(何、だ……？ 急に意識が…… ああ、くそっ…… こいつは、毒か……！)

目の前が暗くなったかと思えば、俺は地面に膝をついていた。

神経毒？ いや、こいつはそんなもんじゃないぞ!?

”結果は見えている”と言ったでしょう？ 安心して、死にはしないわ。ほんの数週間意識が戻らないかもしれないけど……!!

「ぐおおおおおおおあああつ！」

彼女は一瞬驚いたことだろう。毒は確実に体内に回っていた、本来なら動くこともできない筈なのだ。

それをジエイは、肉体の感覚だけで腕を無理矢理に動かし、突き立てた親指を思いっ切りツボに打ち込んだのだ。

「ぶつはあつ！へあつはあああ……！ま、まさか、綴先生の調……もとい、対毒訓練が役に立つ日が来ようとはな……！」

以前、訓練と称して俺に対し行われたあの地獄のような苦行がこんなところで活かされるなんてな……

あれの所為で、自分でも分かってしまう位に毒抵抗がついたり、無意識の内に動けるようになっちまったがな！

「予想外ね……情報以上の化け物ぶりだわ。」

「平然と毒ガス使ってくる奴がよく言うぜ、こん畜生……」

ああクソ、一時的に持ち直したとは言え、完全にこちらが不利な状況なわけで……

そもそも、俺は諜報科だぞ。何故、こんな表仕事をしなけりやならんのだっ！

つまるところ、俺がヤバいことに変わりはない！いやホント、マジでヤバいぞ、どうすんだ……（心の句）

「ふふつ、確かに興味深い存在だわ。あの子が欲しがらるわけね……その身に毒を宿して、あまつさえそれを自ら制しているなんて、本当に……」

……なあんかどんどんヤバい方向に向かつていつてねえか？ 思考が明らかにアレ

じゃないか？

気のせいか？ 気のせいだよな？ 俺はそう思いたい：： そうですね！！

「ますます惜しいわね。貴方は伊・Uに来るべき存在だけど、それをするのはあの子の役目：： 私にも目的がある。私は、『夾竹桃』：： 生きていたなら、また会いましょう

？ 死にぞこないさん：：」

「待、て：： クソツ、駄目か：：」

あいつはそう言い残すと、闇の中へと消えて行った。追いたかったが、無理が過ぎたな。

生きている：： いや、生かされている、と言った方が正しいな：： 完全に見逃さ

れたようなものだ。強かった：： 色々勘違いされてたみたいだが。

俺はかろうじて残った意識でバイクを走らせ、何とか武偵校までは辿り着けた。

救護科の連中は、何故俺が動いていたのか不思議でしょうがないといった表情だった。

．．．まあ、俺自身も何で動けたのか分からねえんだけどな。

だが、正直言って今はそんな事は問題ではない。

．．．「武偵殺し」、「夾竹桃」、「イ・ウー」．．． 何か、かなりキナ臭くなってきやがった。

しかも、何でか知らないがイ・ウーなる奴らの一部から狙われている、のか？ そんな話を聞かされてしまったんだが。

訳が分からねえ．．． 一体、俺の回りで何が起ころうとしてやがんだ．．．

何にせよ、イ・ウーって奴らに関する情報が必要だ。

でも、今はそんな事を考えていられそうもない。疲れが一気に出たのか、俺は丸一日深い眠りについた。

．．．．．。

「何か用？」

『ねえ、もうジエイには会ったんでしょ？ どうだった？』

「まあまあね。確かに、資質はあるみたい。」

『でしょでしょ？ あいつの生存力があればあ… ふっフハハ…！』

「そんな簡単に行くかしら？ 仮にも、私の毒に耐えて見せた男よ？」

『ま、こっちは私に任せて万事OK牧場っ！ 今日はそのちの方をじっくりねっとり見させてもらうよ。』

「…勝手にして頂戴…」

数人の足音が聞こえてくる。既に、周囲は囲まれているようだ。

しかし、何人来ようか意味は無い。彼女は、最初からたった一人の… いや、そいつの持つものしか見ていない。

機は熟し、漸くその時が来た。ずっと探し求めた、“アレ”が遂に自分の物になるのだ。

「…話をしに来た。」

「…来たわね。」

眠りにつく彼を余所に、事件は目まぐるしい展開を繰り広げていくのだった。

## File. 8 Fly Diver

イ・ウーなる組織の一人との遭遇より数日、その接触者「夾竹桃」が逮捕されたらしい。

これは表向きに公表された情報じゃあない。どうやら、各方面のお偉いさん方はイ・ウーの奴らをあまり知られたくないらしい。

どうりで関連情報を調べても何も出てこないわけだ。

まあいい、イ・ウーの構成員が捕まったことで俺も晴れてこのクソツタレな警戒任務ともおさらばって訳だ。

今、俺は羽田空港のロビーにてパンフレットを拝見している。

このところ休み無しの出勤で流石に疲れた俺は思い切って連日休暇を申請したが、これが意外にもあつさり通ったんで、どうせなら誰の邪魔もされないとこにでも行くかということになり、インドア派の俺にしては珍しく旅行に出ることにした訳だ。

だが、かれこれどこに行くか迷走しまくった結果、かなり遅くになっちゃった。

いい加減決めねえといけないんだが…

「あぁーっ!!」

・・・おかしいな、この声は…

「アンタ、ここで何やってんのよ?」

げええ!! 神崎!!! 何でここにいやがるっ!

・・・いや待てよ? そういやあ、神崎が近々ロンドンの武偵局に帰るとか諜報科で話していたのを聞いたような…

まさかそれが今日なのか? 何だ、そういう事か。なら、巻き添えの心配は無いじゃねえか。

「何って… 休暇だ、休暇。」

「ふーん、休暇ねえ…」

「言つとくが、正式に教務科に通った休暇だからな。」

中途半端なことを言つては、どんないちやもんつけられるか分かつたもんじやない。これでこいつも納得する筈だろうし、さっさと行き先を決めねえと…

「そう、なら丁度いいわね。」

おつとお? 何か、雲行きが怪しくなってきたぞ?

生前からの経験が、この流れは明らかにマズいと告げている。間違いない!



「アンタ、アタシの護衛につきなさいよ。」

そらキタ！ だが、それこそ予想通り！

「・・・悪いが、さつきも言ったように休暇中なんだな。今回ばかりは、この休暇中は何の依頼も受けないのは決定事項だ。」

どうだ我ながら完璧な返しだろ？ 威圧感を出しながら疲労感をにじませ、相手から手を引かせるようにする、生前に俺が編み出した人心操作術の1つだ。

さすがのこいつでも・・・

「ふーん、大人しくついて来るのと今ここで“風穴地獄”にされるの、どっちがいい？」  
 ・・・・ありえんだろ？ 真つ向から脅迫してきやがって、こいつが武偵じゃなきゃや正気を疑うぜ・・・

いや、それはどうなんだ？ 武偵じゃなくともおかしくないか？ いかんな、感覚がおかしくなってきたようだ。

「・・・分かった、分かった。やりますよ、お嬢様。」

「最初からそう言いなさいよね！ ほら、もうすぐロンドン行きが出るから早く来なさい！」

理解したぞ、こいつは典型的な自分中心型の性格をしているな？ 俺が1番苦手な奴だ。

つか、この展開は予想外だったから防弾仕様の普段着は家に置いたままなんだぞ、何かあったらどうすりやいいんだ、あぁつたく腕を引つ張るんじゃない!

結局、ロンドン行きのジェットに緊急動員という名目で乗ることになった。

てか神崎の奴、普通に高額便に乗るとはますますお嬢様だな…

そろそろこの便も離陸か? やれやれ、こいつは長旅になりそうだな。

【今すぐ、離陸を中止するんだ!】

「ん?」

何だ? 後ろの方が騒がしいな。

「はあ… 分かりました、機長に掛け合ってきます。」

「よろしく願います。」

ありやあ、遠山じゃねえか。

どういうことだ? 神崎は何も言っていなかったが…

「おい、遠山。」

「ん？ ジェイ！ お前、何でここに……」

「まあ、何だ…… 経緯を話すと色々面倒なんだが、神崎に護衛としてついてくるように依頼（物理的）されてな。お前こそ、何でここにいる？ 神崎は、お前のことは一言も言つてなかつたぞ。」

「当然だ、俺はこの飛行機を止めに……」

「……おっと、機体が揺れた。どうやら、動き出したみたいだな。ん？ 遠山の様子がおかしいぞ。」

「な、何で……」

「申し訳ございませぬ、規則で離陸は中止できないとのこと……」

さっきのCAが戻ってきた。話の内容から予想するに、遠山はこの便の離陸を中止させようとしていた様だ。

「しかたない、こうなつたら直接何とかするしか無い。」

「どういうことだ、この便に何か問題があるのか？」

「いいか、この便には武偵殺しが……」

「アンタ！ ここで何やってんのよ!?!」

遠山が何か言いかけた所で、声を聞きつけたのか部屋から神崎が出て来た。

お互い、顔を合わせるや何か言いたげな表情になっていたのが一目で分かった。「……少し機内を見て回ってくる、後は頼んだぞ遠山。」

俺としても、神崎の相手は少々難しいところだったんで正直助かった。神崎の方は遠山に任せ、俺は機内の巡回をすることにした。

1階があつたのか。さっきの客室は2階にあつたわけだな。

本当、金持ちの乗る物は無駄に充実してるな。

それにしても、さっき遠山の奴、”武偵殺し”がどうか言つてやがつたような……まさか、この機内に？

もし、本当に武偵殺しなら、狙いは神崎ということになるが…… 無差別犯行じやなかつたのか？

「うおっ!!!」

《お客様にお知らせします。当機は、雷雲を回避して飛行しています。雷はしばらく続くと思いますが……》

「雷か…… 久々に間近で見たぜ。」

天候は荒れ模様だな。出る前までは、それでもなかつた筈なんだが。しばらくは続く



「おう。」

そう言つて、合図と共に突入していった。俺も、傍から中の様子を見やる。

だが、そこで見たのは…

「ふふつ、今回もまんまと引つかかてくれましたね。」

あの時、遠山と話していたCAじゃないか。だが、明らかに様子がおかしい。

なるほど、こいつが主犯だな。

しかし、次の瞬間に俺たちは衝撃を受けることになった。

「なっ、お前は—」

「！ あいつ…！」

変装を脱ぎ捨て、現れたのは… 峰 理子だど!? 何であいつがここにいる…

「お前が、武偵殺しだったのか!」

「そうで—す☆」

馬鹿な、あいつが武偵殺し… 内部に敵はいた、つてのか?

「お前は… 一体何者なんだ?」

「… 峰・理子・リュパンIV世… 理子は、リュパン一族の曾孫。」

リュパン… すげえ名の知れた大怪盗じゃねえか。その子孫だど? そんなこと

がありえるのか?

いや、元の方での基準で考えても意味は無い…… この世界でなら、ありえることなんだろう。

「兄さんを…… 殺したのか？」

「アハツ！ キー君のお兄さんはあ、理子の”恋人”なんだよ！」

「!!」

「落ち着きなさい、キンジ！ アイツの挑発よ！」

「これが落ち着いていられるかつ！」

マズい流れだ…… 何とかしたい所だが決め手が無い。クソツ、なんとも歯痒いな。

しかし、これまでの話の中で理子の奴の目的が見えてきたぞ。

リュパン一族において、歴代リュパンの名声と存在はあまりにも大き過ぎる。

あいつは、比較対象であるそいつ等よりも自分が優れていることを示したいようだ。

だが何故、その対象が神崎なんだ…… あいつの言っていた”オルメス”、確かフラ

ンス語だったか？ その意は…… ”ホームズ”。

神崎がホームズに連なる存在なのか？ リュパンの子孫がいるなら、そうだとすても

おかしくは無いが……

「しつかり役目を果たせよ、キンジ？」

始まったか……！ 正直に言つて、実力的に見れば双方共に五分といつたところか？

とは言え、戦力的にはこちらが有利の筈だ。

と、そう言ってる内にあいつの懐に入った！

「峰・理子・リュパンIV世！」

「お前を逮捕する…！」

「ふふふつ、アツハハハ!!」

な、何だ!? あいつの髪の毛一本一本が生きてるかのよう動き出したぞ！ 超能力持

ちか!?

「理子もアリアと同じ2つ名を持つてるけど… お前のそれは本物じゃないっ!!」

「っ!!」

「!? アリアアア!!」

なんてこった！ 一気に形勢逆転かよ!! だからあいつ、あれだけ余裕面だったのか…！

だが、今の状態は非常にマズい…！ しかたない、かくなる上は…

「アツハハ！ 勝てる、勝てるよお！」

「くそっ！」

「走れえ！ 遠山あああ!!」

咄嗟の声に反応した遠山は、神崎を抱え走りだす。それと同時に、俺はフラッシュユグ



レネードを遠山の背後に投げ込んだ。

上手く理子の視界を遮り、追撃を阻止することに成功した。

「くっ！ キークうん！ この狭い機内で、どこに逃げるつもりー？」

その間に遠山は後退、残ったのは俺と2人だけだ。

「あーあ、やっぱお前を乗せたのは間違いだったかなあ……」

「……何だと？」

「ふっ、まあ自分が偶然居合わせたと思ってるわけ？ それ位、すぐ分かると思ってたんだけど……」

「俺がこの便に乗ること自体、お前の筋書き通りだと？」

「ピンポーン！ 最近ひっきりなしに事件が舞い込んできたのもお、この日に休暇を取ってあいつと会うことになったのもお、みーんなこの天才りこりんの計画だったの  
でえーす☆」

「……そうか、はなからこいつはこの為に前々から計画を進めていたわけだ。」

俺は、既にこいつの手の上で動かされていたのか……

「だとしても理解できないな。『S』ランクでも超偵でもない俺に、目を付ける理由が何処にあるっ？」

「それはジェイ、あんたに可能性があるからだよ……」  
「伊・U」に來ない？ そしたら

今より断然強くなれる、あなたの全てを引き出してあげられるよ、ジエイ？」

「イ・ウー…？」

「……なるほど合点がいったぜ。俺に近づいたのも、ステインガードローンの件も、俺がイ・ウーなる組織に相応しいか試す為だったわけか。」

「……。」

「さあ、どうする？ J・マックス!!」

「……俺は、まだ死ぬわけにはいかねえ… 殺されかけた奴の言う通りに従うつもりはない。」

「そっかあ… ま、どっちにしる黙らせるつもりだったけど!!」

「うおおっ!!!」

結局同じじゃねえか、とんでもねえ奴だ！ と、んなこと考えてる場合じゃねえ…

対超能力者戦闘術はSSRで一通り身につけているが、こいつは予想以上だ！

こんなことなら、詳しく学んでおくべきだった…

今は何とか耐えているが、このままじゃいずれ捌き切れなくなる。

遠山達が復帰するまで、何とか時間を稼がねば！

「無駄無駄！ あなたの銃も、この狭い中じゃ役に立たない！」

「そうかもな。だが、やりようはある。」

あいつの言う通り、俺のマグナムの長射程もこの空間じゃ意味をなさない。

となれば、ここはやはりヒートナイフ…… 狙うは、あのナイフを持った髪だ！

「ふっ！」

「!! 良い動きしてんじゃん、ならこっちも！」

くそっ！ あいつ、素直に2丁拳銃に切り替えやがった。

拡張マガジンで弾数増やしてるとは言え、ハンドガンとじゃ比較にならん！

徐々に後退しながら、攻撃を避けつつ反撃してるが……

(マズいぞ、弾も残りわずかだ。どうする…… ん?)

メール? 一体誰が…… 遠山だと!?

「理子を誘い出してくれ 後は俺と姫様に任せろ」

あ、あいつ…… この状況下で…… なのか? 全く、何て奴だ……

「……」

「どうしたのさ? さっさと覚悟決めて出てきなよ！」

だが、俺には最初から道は1つしか無い。”信じる”ということしかなっ!!

「やってられつかよ!!!」

「!! 待ちやがれ！」

迫真の演技で勢い良く飛び出して、あいつがいるであろう先の客室に向かう。

理子の奴も追ってきてはいるが、流石に俺の瞬発力には追いついていないようだ。

・・・確かこの角の先、3番目のとこだった筈！

「チツッ！ 逃げ足の速い奴… ま、先にあいつを仕留めた後でいつか。」

だあ！ マジでヤバかったぜ、おい。今の状態の俺だけじゃ、確実に神崎もやられていたに違いない。

(上手くやってくれているといいが…)

今は1階にて休んでいる。流石の俺でも、ここまでとなると疲れるもんだ。壁に寄り掛かって座り込んでいると…

「うおっ！ 何だ！」

様子が変だ、急に機体が傾き始めたぞ！ パイロットは？ まさか、あいつに？

「！ ジェイ、大丈夫か？」

「ああ、こっちは問題無い。そっちはやったのか？」

「残念ながら、不意を突かれて逃げられた。この先に向かった筈だ。」

「分かった、弾は心もとないが行けるぜ。」

「ああ、今度こそあの”子猫ちゃん”を捕まえてあげないとな。」

「・・・。」

いやあ、まあ・・・ と、とにかく！ 急がねえとな！

いやがった、あいつ・・・ 壁にもたれ掛かって何を・・・

「それ以上は近づかない方がいいよ。」

!! よく見れば、あいつの周りにびっしり爆弾が張り巡らされてやがる・・・！

「今回は、ここまでする。キンジも、伊・Uに来る気になつたらいつでも来なよ。」

「次があると思ってるのかよ？ それこそ、ここはクソ狭い密室だぞ。」

「私達のことあんまり舐めない方がいいよ？ あ、それから伊・Uから素敵なプレゼントがあるから・・・」

と、あいつが話し終えた瞬間に周りの爆弾が起爆して壁が抜け・・・ てえ!!?

「また会おうね・・・」

なっ！ 爆薬を最小限に調整してやがったか!! 窓からは、制服をパラシュートとし

て開いた理子が飛行機から離れていくのが見えた。マジか…

『さらに1名様、ご案内ー☆』

………は？

何だ？ 今、物凄く嫌な音声が聞こえたんだが… そう考えたのもつかの間、俺の隣の壁がいきなり吹っ飛んだ！

ぬおおお!! だがこれしき踏ん張ってえ… あ、足元の布に右足取られて片方浮いちまった。

「ぬあああんでだあああああああつ?!?!」

哀れ、身体を留めておくこともできず、無情にもその身は未だに下々を覆い隠す雲の上に放り出されてしまった。

しかも見えてしまった。遠くの合間から、こちらへと向かって来るイ・ウーからと思しき「置き土産」が…

「ミ、ミサイクルだどっ!? 軍事レベルの戦力を持つてののか、奴らは!?」

その2つの鉄槍は、未だ乗客と遠山達を乗せた機体のエンジンを木端微塵に吹き飛ばした。

あいつ等、大丈夫なのか…? ?

て、俺もそんなことを考えてる場合じゃないぞ!

このまま行けば、俺はニュートン力学によつて導き出された加速度で増速落下し、絶対に助かる可能性の無い絶望の海面キスをする羽目になっちまう!

畜生がっ!!! あのクソビッチ!!! パラシュートすら無えんだよ! どうすりゃいいってんだよ!

「クソツタレ! こいつが、本当のいか八かだっ!!」

もう、こうなりやヤケだ! 俺は、持つて来ていたバックパックからある物を取り出した。

それは、一見してみると何なのかさっぱり分からないが、何か折り返された物のようだ。

広げてみると、それは自身の身長位の長さにまでなり、形は例えるならサーフボード

のように見えた。

これこそ、俺がでんごろうと共に開発した『スカイボード』の試作品！

ホバー移動をコンセプトとする一人乗りのこれは、ボードという携帯における欠点を特殊金属繊維を用いることで持ち運びを容易にした画期的な近未来装備だ！

まだホバー機構はできてないが、ボード自体は既に完成すると言っている。

助かる方法は唯一つ！ ボードに身を任せ、激突を回避するしかない！

本来ならそんなの無謀の極みだ、助かるわけがない。だがな……

「死ぬわけにはいかねえんだあああああ!!!」



## File. 9 雫の中の翼

うねる海上を漂う一人の男、雨に打たれながらももたれる彼は徐々に意識を取り戻し始めた。

「ぐおおお……へっ、鮫の餌には、なつてない、ようだ、な……」

ひとえにボードのおかげと言うべきか、奇跡的にも彼は所々骨折気味だったが内臓破裂までは至らなかった。

またしても死の運命から生き延びてしまった上、命懸けという意味では4度目に当たる生還である。

荒波を必死に耐えながら陸に向かおうとするが、ここで彼のプライベート回線に通信が入った。

普段、この回線を滅多に使うことが無い為に一体何事かと通信に出た。

「……こちら、J・マックス。名を述べられたし、どうぞ。」

『俺だ、ジェイ。予想通り、生きていたようで何よりだ。』

「はっ、おかげ様でなキザ野郎。危うく向こう側が見える所だったけど、この通りだ。」

『それだけの口が利けるなら安心だ、そこで無理を承知だが頼みがある。』

「……言ってみろこの野郎。こうなりや最後までやってやる。」

今、あいつ等はエンジンをやられた関係上すぐに着陸する必要がある。

だが、肝心の着陸地点である羽田空港には着陸許可が一向に下りない。

これはおそらく、政府か防衛省が囁んでいるに違いない。

しかし、悠長に許可を待っている時間も無い。エンジンを吹き飛ばされた際に燃料漏れが発生し、飛んでいられるのは後数十分持つかどうか……

操縦は神崎がしているが、大型機経験はほぼ皆無のようだ。そうか、ライセンス持ちの俺を引きずり落とす魂胆もあつたのか。

何にせよ、早急に対処すべき要件だ。

『武藤達と連絡を取っていたんだが、無線に割り込まれてしまったよ。』

「なるほど、俺の通信回線を使えば奴らの妨害は受けない、ってわけだ。」

『やれるか?』

このプライベート回線は、下手な通信回線よりセキュリティレベルが高く、国防省でも介入するのは至難の業だと自負している。

「ビッチの相手より楽勝だぜ。」

俺は携帯端末を取り出し、すぐさま武偵校の回線につなげる。

「打つ手、無しかよ！」

「・・・待って下さい！ 秘匿回線で通信が入ってます。」

「通信だと？」

『聞こえているか？ 聞いてるなら応答しろ。』

「その声、ジエイか!? 大丈夫かよ、飛行機から落ちたつて聞いたぞお前!」

『今、話してる奴が死人に思えるか？ 時間が無い、手短に話すぞ。』

「あ、ああ・・・ そうだな！ 分かった！」

『いいか？ 今から、俺の回線を経由して遠山達につなぐ。お前らが頼みの綱だ。』

「分かった、こつちもあいつ等に伝えなきゃなんねえことがある。頼んだぞ！」

『全く、あいつも良い友を持ったもんだな。』

『こちら防衛省、当機はただちに誘導に従い着陸地点へ・・・』

『騙されんじゃねえぞ、キンジ！ あいつ等は既にお前らを見捨ててるっ!!』

思った通りだ。既に、遠山達の機体の周りには自衛隊お抱えのジェットが飛んでる。撃墜許可まで下りているのは驚いた、VIPも乗せてるであろう乗客の命を救うよりも市民という建前を優先したんだからな。

ま、予想できたことだがな。

『いいか、キンジ！ 武偵は決して仲間を見捨てねえ、俺達も何とかする!!』  
『ああ、分かった。』

そして、遠山は今の頭脳で導き出した最善策を話した。

学園が点在する位置とは別に、**“ダダツ広い”** 空き地島と言われるところがある。

そこなら障害物も無いし、緊急着陸で被害が出る心配はほぼ無い。考えたもんだな…

ただ、対角線上限界まで使って着陸できるかどうかの距離故にかなりの危険が伴う。

加えて、今の時間帯では真つ暗闇の中でそこを特定するのは不可能だ。時間もあと僅か…

『くそっ！ どうなつても知らないからな!!』

… 武藤の奴、思いつ切り飛び出したみたいだが… まさか、今から？ 無茶し

やがんな、と思えば…

『つーわけで、悪いがジエイも手伝ってくれねえか?』

「負傷者に無理難題を言うってか? 上等だこの野郎。」

『頼むぜ! 俺もあるもの出せるだけ出してやる!』

「まったく、どこまでも真つ直ぐで義理堅いつつうか、馬鹿みたいに素直つつうか…  
聞いてたか、お前ら?」

『任せとけ! 俺の伝手であるだけ用意する。へへつ、まさかこんな思いがけず俺のド  
ラテクを披露することになるとは、腕が鳴るぜ!』

『普通のライトが数個位じゃ、間に合わないかもな。試作型の超光源照射機を出そう。』  
「決まりだな、俺もへりで向かう。」

そうこうしている内に、彼の元へ黒い塗装の武装へりが飛来した。

このへり、操縦者すらも乗っていない完全無人化されたオリジナルカスタム機なの  
だ。

ワイヤーで吊り上がり、中へと入っていく。

「奇跡って奴を、現実にしようじゃねえか。」

「見事に何も見えないな…」

「そうね…」

空き地島上空付近、既に着陸態勢には入れる状態にはある。

しかし、肝心の着陸地点は何処にあるのかすら見えない分からないという、予想以上の暗さだ。

このままでは… だが、何も無い筈の場所に1つ、また1つと光が出てくる。

気づけば、その光は空き地島の形を照らし出すように輝いていた。

そこにへりも飛んできて、ライトで着陸地点へ促している。

あいつ等か、遠山はすぐにそれを察知した。

『キンジ！ 俺、学校の使えそうな物全部持って来た!! 後は何とかしろっ!!!』

『知り合いに頼んで借りてきた! ”緊急事態”だ、つってな!!!』

『まったく、この少人数でこれ程用意するとなると、少しは鍛えてる俺でも流石に疲れるぞ…』

『ぞ…』

『お前ら…』

『このチャンス、無駄にするんじゃないぞ?』

「……ああ!!」

全ての運命を乗せて、飛行機は仲間達を作った。最後の希望へと突っ込んでいった……

「お前は本当に無茶をするな。普通なら死んでる所だぞ?」

「やめてくださいよ先生、あれは正真正銘の”奇跡”ですよ。まあ、これに始まったことじゃないですがね。」

今、俺がいるのは病室の1つだ。散々動きまくってたように思った奴もいるかもしれないが、俺思いつ切り骨折してたからな?

遠山と神崎、乗客達の乗った飛行機はギリギリ着陸に成功し事無きを得た。

けど、短期間で2度も世話になるのは今回が初だ。そうそう世話になって堪るかよ、なりたかねえよ。

散々な目にあつた事件だったが、終わってみればまた不死身説を濃厚にしてしまう結

果になつちまつた。

「J・マックス：　やはり、”不死身の男”の名は伊達じゃないってとこか。それも全て、お前の幸運のおかげか？」

「運勢は万年最悪ですがね：。」

そうさ、この悪運と不運が混ざり合つた存在の俺だからこそその結果なんすよ綴先生。

2つが均衡を取り合つた結果、この有り様なんだけどなつ！

「まあ、そんな事はどうでもいいけどな。」

しかし、俺の回答は全く気にした様子も無く窓際に移つた先生は外の様子を見ながら続ける。

「1人で突つ走り過ぎるなよ？　今回は偶々”運に救われた”だけだ。お前には、仲間がいることを忘れるな。いつも間違つた時に間違つた場所にいる奴、それがお前だからな。」

「.....」

分かつてますとも。今回のことで、それは酷く痛感した。

今まで、たった1人でやってきても何の問題も無かつた。だからこそ、それでもやっていけるといつの間にか思っていた。

仲間と呼べる奴はいたかもしれない、だが心の奥底では何処か疑問を持っていたのか



もしれない。

所詮は何処までいっても人間だ、いくら今の俺でも一人でやれることには限界がある。

情けない奴だよ本当に：： 後輩達にあれだけ大口叩いておきながら：：

だが、その後輩達は事件の後に俺に会いに来た。心配した様子だった、一度の關係の筈の俺を：：

柴田も、米村も、武藤も、不知火も、遠山も、あの神崎も、同じ俺を案じてくれていた。

ははっ、ここまできると笑えてくるぜ。孤高気取りで居続けたつもりだった、自分にな：：

「確かに、俺はいつも自分の意志とは關係無く巻き込まれ、一人でやり遂げてきたと思ってきました。もし、偶然でないとするならば：： それはもう『運命だ』としか言いようがありません。」

ここで変わらなきゃあ、俺はもうこの先、生き残れないかもしれない。だからこそ：： 「けど、これからはあいつ等もどんどん巻き添えにしていけますよ。お互い様ですからね。」

今は、ここから始めていこうと思う。俺ばかりじゃ不公平だしな。

「ふっ、そうか…。」

綴先生は、俺の回答に満足したのか、静かに病室を出ていった。

日の光だけが、俺を見ていた。その時に、不意に俺の携帯が音を立てた。

「よう、遠山か。」

『おう、無事か?』

「昨日話したばかりだろ…。」 そうじゃなきゃ、俺は留守電にも出てねえさ。」

『はは、いつものお前で安心したよ。』

「この談笑もいつぶりか…。」 懐かしくも思えてくるな。

「遠山よ…。」

『ん?』

「改めて、よろしく頼むぜ。」

『何だよいきなり…。」 まあ、転校までの付き合いだろうが、よろしくな。』

「ああ。」

『アタシも忘れてもらっちゃ困るわねっ!!』

『ちよっ! おまつ…。』

『こーらー! キンちゃんにくつつくなあー!』

耳をつんぎくような大声が聞こえてきたと思えば、あつちは相当賑やかみたいだな。

『それと、堅苦しいのはいいからアリアでいいわ。アンタも“仲間”なんだからね。』  
「ふっ… ああ…！ 分かった、アリア嬢。」

『仲間を信じ、仲間を助けよ』、か…

…信じてみるか、この幻みたいな世界を、生き抜く為に…！！

## File. 10 凍てつく悲壮

俺はJ・マックス、これかなり久々だな……

激動の末に何とか無事に解決したハイジャックから3日。

骨折で早くもまた救護科の世話になったにも関わらず、驚異的な回復力で復帰決定となった。

救護科の奴らは、まったくもって信じられないって顔を誰しもしてたな。俺も信じられん……

とまあ、過ぎたことはいいとして、大事件の後だというのに今度はアドシールドだ。

端的に言えば武偵の競技大会みたいなものだが、内容も武偵ならではの銃器を使った競技などもする点ではまた違ってくるのかもな。

休む暇も無く武偵校へと赴く。とは言え、俺は選手枠じゃない。

確かに、色々な競技への参加のお声が掛かっていたのは事実だ。

……自分で言うのもなんだが、「C」ランクに任せることじゃねえだろ？

何より、俺には教務科から直々に依頼されていることがある。だから参加しない。

その依頼は……アドシールド期間中の警備、緊急時のバックアップ要員だ。

「なあ、頼むよジエイ。」

「駄目だ。今回ばかりは、俺も自分の身が掛かっているからな。」

昼過ぎの武偵校屋上、あのハイジャックを見事解決し、神崎とコンビを組むことになった遠山とある件について話していた。

星伽生徒会長の護衛についてだ。つい最近になって始めたらしい。

事は、諜報科にても話に出ていた『魔劍』デユランダと言われる犯罪者のことが切っ掛けだ。

SSRでも同様に、星伽会長への接触の兆しがあるという結果が出ているらしい。

超偵ばかりを狙った犯行が主だが、その素性に関しては何となく情報が無い。存在してるかも怪しい奴だ。

星伽会長の護衛に神崎が名乗り出て、遠山もついでに成り行き上で護衛につくことになったようだ。

アドシアードが開催される関係上、そうすることが出来る奴は限られてくるし、手が空いている「S」ランクが条件無しに請け負うってんなら俺だって同じように頼むだろう。

問題なのは、遠山特有の女性関係のもつれが原因で神崎と星伽会長の組み合わせが最悪の状態にあることだ。

周知の事実だが、遠山は「あの状態」ならまだしも、普段は女性の扱いにはてんで知識が無い。それをどうにかする為に、俺に助けを求めて来たこいつの話は今まで聞いていたのだ。

「そんなこと言わないでくれ……！俺一人であいつ等とやっていける自信が無いんだよ。」

「んなこと言っても、この任務をすつぽかしたらエライことになるのは俺だ。もしそんなことがあるものなら、俺は「地獄の訓練」に「拷問演習フルコース」だ。」

かなりどストレートな字面に身震いしたのか、それ以上何か言ってくることは無かった。

そりやそうだ。自分にも飛び火してくることがあるものなら、生きていられる自信なんて無いだろう。一番手軽に、この世の地獄を体感出来るわけだからなっ！（震え声）何より、女性の扱いを俺に問うってこと自体が間違いなんだよなあ。

勿論、知識皆無の遠山とは違いそこら辺に関しての知識は生前のこともあり詳しいのは確かだ。

だからと言って、女性との付き合い無しの場合にどう対処すべきかが導き出せない。

へたに出てしまえば、状況の更なる悪化につながってしまう為、回答を言えないのだ。

ぶっちゃけ、言った遠山に神崎達が詰め寄って俺の名を出されても困るからなんだが。

「とにかく、今回は無理なんで諦めてくれ。そんじゃ、監視ルートの確認に行くから、じゃあな。」

心底うな垂れた状態の遠山を尻目に、俺はアドシード期間中の警備エリアを見て回りに出た。

「．．．．．そう言えば、何であいつ額の辺りにアザなんかあつたんだ？」

「．．．．．」

やれやれ、この人工島の領域内ってだけでもかなりのモンなのに、さらに隅々のチエツクもしなきゃなんねえんだから難儀なもんだな。

俺の他にも一応人はいるが、担当は主に会場付近で俺はよりにもよって外周の方を担

当しなけりやならない。

まあ…… 優秀な奴がアドシアードに引つ張り出されてる以上、俺みたいな戦闘経験者がここになるのは当然の流れだが……

何も、ほぼ俺一人に押し付けなくてもいいじゃねえか。無茶振りにも程があるぞ！

「……つたく、やってらんねえぜ。」

しかし、ぼやいた所でこれをやらなければ「死亡確定」なんだ。

一通り確認箇所は見て回ったことだし、今日はこの辺にして帰るとするか……

「さてと…… ん？ 誰だよ一体…… あい、もしもし？」

『ジェイか？ 少し話したいことがある、B-15の広場に来てくれないか？』

「遠山？ …… B-15広場だな、今から向かうから少し待つてろ。」

適当に返したが、あいつの話って何なんだ？ 内容聞いときやよかつたな……

会話をすぐ済ませようとするのは悪い癖なんだが、時々やつちまうんだよなあ。

ま、また掛けるのも何だろうし、直接会って話しゃいいだろ。



で、B-15エリアまで来たわけだが……　つーか、あいつは何でわざわざここを指定したんだろうか？

面倒臭がりなあいつなら、寮とか他に幾つか候補はあるはずだ。寮からは離れてることを指定場所を選ぶ理由はほぼ無いと言っつていい。

ん？　ならこれには何の意味がある？　さつきから遠山の姿は見えねえし、もう待っていると思つてたんだが……

「そこにいるのは、ジエイ君？」

「あ？　誰かと思えば星伽生徒会長。」

そこへ現れたのは、話に上がっていた人物の生徒会長にしてSSR（超能力捜査研究科）「A」ランク、星伽　白雪その人だ。

普段から常人とはかけ離れた優等生ぶりだが、遠山には弱い。（偏見）

「ジエイ君は、何でここに？」

「いや、遠山の奴が話があるつて言うんで、指定されたこの場所まで来たんだが……　会長こそどうした。」

「そう……　私はちよつとした用事でね……」

「そうか、じゃあ見てないのか……」

星伽会長は遠山に呼び出された訳じゃ無かったみたいだな。

「……いや待て？　今、会長は何て？」

「すみません、会長。会長は遠山から何か聞いてませんかね？」

「え？　特に何も無いけど……」

「おかしい……あの会長が遠山の話で何の反応も示さないなんてことがある筈が無い。」

「いや、言い方はアレだが会長は最早遠山を崇拜してるんじゃないかって位にあいつの話題に対して過敏に反応する。なのに、今ここに居る星伽会長はそれをスルーしている。これが違和感しか感じないというのが恐ろしい……」

「ヤバいな、上手くは言えないが本能的なものが一刻も早くここを去れと警告を出している。」

「取り敢えず、目の前の星伽会長に気を悟られないように離脱を図ることにした。」

「……そうか。ここに居てもしょうがないし、あいつを探しに行くか。じゃあな会長。」

「1人でここにやって来るとは……情報通りだな。」

「誰だ今のは？　後ろから聞こえた様なんだが、明らかに星伽会長の声じゃ無いぞ……」

もう1度振り返る、がそこには会長しかいない。

「気づいていたのだろうか？　だから、距離を取ろうとしたんじゃないか？」

だがその声は、間違いないく星伽会長の口から発せられていた。

「・・・お前、誰だ？」

「いざれ分かる。」

そう言った星伽の姿をした何かは、どこからともなく巨大な剣を取り出して俺に斬りかかって来た！

「ぐおっ!？」

咄嗟に俺は回避することができたが、振り下ろされた剣は足元にあつた鉄骨を真つ2つに両断していた。

なんつう切断力だ!？　地面にも深くめり込んでやがる。

それを難なく引き抜いた偽星伽は、再び俺に向かつて来る。

あれだけデカイ剣を持ちながら素早い動きなものもそうだが、それを軽々と振りぬいてくるのも凄いな！

おかげで、ギリギリの所を避けなければいけない肝冷えものの展開だ！

「どうした!　お前の力はその程度かっ!」

んなこと言われてもなあ!　いきなり襲い掛かって来た癖に何言ってくれてんだこいつ!

刀みたいな長物があればいいんだが、生憎そんな敵は想定して無かったんで通常武装のヒートナイフしか無え。

「畜生！ やってやらあ…！」

しかたなく、ヒートナイフを抜いて対抗してみる。ナイフとは言え、こいつはチタン合金でできてる超硬度ナイフ！

あの剣ともタメ張れる筈だ。

「ふっ！ はっ！」

「であっ、クソツッ！」

しかし、相手の猛攻は留まることを知らない。押されながらも俺は反撃の機会を狙っていた。が…

「はあっ！」

「ぬああっ!?!」

勢いよく振りぬかれた横薙ぎを受けた俺のナイフが、刃先が完全に無くなってしまっていた。

「なっ！ チタン合金だぞ?!」

「ふんっ、我が剣に斬れぬものは無い！」

そりゃあ、堂々と鉄骨を両断してたが、まさかチタン合金をへし折るなんざ想像でき

るか！

直後、右薙ぎを屈んで避ける、低い左薙ぎを飛んで避ける、振り下ろしをバク転して避ける！

アクシオン主演俳優も顔負けの身体捌きだぜ！

「やるな。その実力は評価に値するぞ。」

「褒められた所で、全然嬉しかねえよ偽物野郎。」

距離ができた俺は、漸くデザートイーグルを抜いた。今までは接近し過ぎて、構える暇も無かったからな。

遠距離に持ち込めればこっちのモンだ、なのに銃を構えてる俺を見てもあいつは何の反応も無い。

寧ろ、笑っているように見える…。ヤケに、さつきから周りが冷えてきたのも含めて妙だ。

ふと、俺は自身の持っているデザートイーグルに目を向けた。

「!! 凍ってる!?!」

持っていた銃は、ハンマー辺りが文字通りに”凍っていた”。決して比喻とかでは無い。い。

しかも、それを見ていた偽星伽が何か動きを見せたかと思うと俺の付近が急に冷えて

きた…

「!! やべっ!!!」

持ち前の反応速度でその場から飛び退き、元居た場所を見ると氷の塊が鎮座していた。

「ほう、あれを避けるか。」

「超能力者か…」

超能力、それも氷の類いの力か… それなら、俺のデザートイーグルが凍っていたのも説明がつく。

おそらく、どこかのすれ違った場面で俺の腰にあつたのを直接凍らさせたんだろう。

さらに、周囲に冷気が漂っていた所為で凍っていることにも気づけなかったわけだ。

…なんて、呑気にしてる場合じゃねえぞ!? ナイフは折れた、銃は使えない、他に使える武器は… どうする!?

「いよいよもつて、追い詰められたな?」

「クソツ、目的は何だ? ” 武偵殺し ” のつもりかっ!」

「ふん。」

答える気は無いってか… マズい、逃げ場が無い!! その剣が真上に振り上げられた。

斬られる!! だが、俺は近くにあつたそれを見逃さなかつた。

「そおらっ!!!」

「んなっ!?!」

足元に転がっていた鉄パイプを器用に蹴り上げ手に持ち、向かつて来る剣身に横からブチ当てて刃の軌道を強引に変えた。

この展開は予測してなかつたのか、あいつは少しの間動きが鈍つた。

そのおかげで、俺は再度あいつとの距離をとることができた。

「大した腕だな... 流星に今のは予想外だつた。」

「へっ、”何でも”使うのさ。最強コックも俺の腕は認めている。」

「面白い、なら次は腕もろとも叩き落して...」

だが突如、構えを解いた偽星伽は、一旦下がると何やら端末を取り出した。

「時間か... 予想以上に戦闘が長引いてしまったな。」

時間制限:...? 一体どういうことだ... とにかく、奴の予定ではもつと早く俺を

仕留めていた、のか?

「また会おう、”J・マックス”。」

そう言い残すと、奴はビルの合間に消えて行つた。

「...何だつたんだよ...」

ますます謎が深まるばかりだ、奴の狙いは…… 何で俺を襲った？

今は、とにかく疲れた身体を休ませる他無かった。



## File. 11 ダークホース

「まさか私を退けるとはな…。」

何処とも知れぬ場所、そこに彼女はいた。

鎧姿に自身の背丈程あろうかという大剣、銀に輝く髪をなびかせ彼女は思案する。

「超能力者でないにも関わらず私と渡り合って見せたあの戦闘能力… 面白い。星伽の巫女とついでに連れて行くのもいいだろう。」

”魔剣”と呼ばれた彼女は、ここへ来た目的がある。

彼に接触したのは、知人から話を聞いた上でどんな奴か確かめる為、下準備の合間に誘い出したのだ。

「さて、情報は揃った。しかし、こんなことであの男が乗ってくるのか？ ……まあ、当初の目的が果たせたならそれでいいか。」

決行の時は近い。辺りに冷気が漂い、なお一層奇妙な空気を作り出している。

全ての準備は終わった。彼女は剣を取り、暗闇の中へと消えていった。

「理子め… 中々の逸材を見つけたものだ。」

ああ、クソツ！ 毒女とイカレビッチの次は氷の剣士つてか!? 次から次へと、よくもまあこんだけ出てくるもんだ!

もう腹一杯だ、十分だろう…。 こういう厄介事は遠山の担当じゃなかったのか? 何にしても奴は危険だ。警備の関係もある、何の対策もしないわけにはいかない。

っーわけで…

「頼んだ物は出来たか?」

「もちろん。潤沢な資金の下、すぐに仕上げてやった。しかし、今度はこんな大型剣とはな…。 一体何があつたよ? ほれ、新しいヒートナイフだ。」

先の戦闘で根元からポッキリ折れちまつたヒートナイフの新品をでんごろうから受け取り、鞘に収まつたかなり大きなブレードを持った。

見た目は、完全に強化サイボーグ用『アーマーブレイカー』そのものなのだが。

「まあ、な…。 色々あんのさ。」

「ま、俺としては仕事をこなして報酬を得る、それだけでいいがな。あんまり無茶し過ぎるなよ?」

「お前に言われちゃお終いだってんだよ。まあ、それ位分かってらあ、済まないな。」

本当、こいつはいい仕事をする。この出来は、正しく注文通りだ。

これで、用意は完了、後は奴が現れるかどうか…。出ないことに越したことはないが、果たして…?」

・・・思った以上に事はスムーズに行っている。アドシールドの方は順調にいけばもうすぐ終わり。

このまま閉会式まで無事に…

「・・・ん? メール…。誰から…!!?」

思わず俺は周囲を見回す。何だこいつは…

(見られてないか? チッ! あの氷剣士だけでも面倒だつてのに!)

はつきり言ってしまうえば、この内容は俺に対する脅しだ。にわかには信じ難い、俺以外は誰も知らない筈だぞ。

だが、その時俺の脳裏に遠山の言ったあのことがよぎった。

《魔剣は、必ず犯行前に何かしらの兆候があるらしい。脅迫メールとか…》

魔剣？　ありえん、あれは超偵を狙った犯行をしてきた奴だ。星伽会長が狙われるのはともかく、何故俺が…

魔剣は過去を見ることが出来るとでも言うのか？　嫌な予感がしやがるぜ…　だが、魔剣ならそれを追ってるらしい神崎に協力を…

いや、これは誰にも知られちゃいけないことだ。危険すぎるが…

「行くつきやねえか…」

周囲の目を避けるように、静かにメールで指定された場所に向かう。悪いな先生方、これも任務遂行の為だ…

「くそっ！ 何処だ、何処に居るっ!？」

場面は変わり遠山、突如消えてしまった白雪を探して奔走していた。

情けない、彼女の気持ちを分かっていたいなかった自分が不甲斐ない。後悔の念が募る、そして焦る。

見事に思考の悪循環に陥っていた。

『遠山さん。』

「もしもし、レキか?! . . . っ!!」

『. . . 落ち着いてください。』

だが、レキの機転によりここでようやく我に返る。足元に放たれた一発は、彼を冷静にさせる切っ掛けを作った。

「. . . ああ。」

さあ、考えろ。あいつは何処に行った？ 痕跡は無いか？

「レキ、そこから何か変わった処は見えないか？ 何でもいい。」

『. . . . . 地下倉庫の入り口にマックスさんが入って行くのが見えました。』

(ジェイ？ 何でそんな処に. . . いや、長く考えてる時間は無い。)

「地下倉庫だな？ 分かった!」

今は、僅かな手掛かりを頼りに行くしかない. . . !

「case D7」とは… 穏やかじゃねえなあ。それよりも…」

まったく、何てどこを指定しやがる… これはマジで死ぬかも分らんな。

武偵校でも指折りのデンジャーゾーンに来る羽目になるなんて、ここが墓場になるなら遺骨すら残りやしねえぞ…

まあ、あの火薬庫内部じゃないだけまだマシだ。あそこじゃ、俺の火器全般がアウトだからな…

【来たか…】

「と、おいでなすつたな？」

こいつが魔剣か… 姿は見えねえが、かなりの手練れだな… だが、まずは聞かなきゃならない事がある。

「おい、こいつは一体どういう意味だ。まさか、過去を見たなんて言わないよな？」

俺は、送られてきたメールを見せつけながら魔剣と思しき奴に対しかまを掛けてみ

る。

「お前の過去の秘密を知っている 全てを知りたくば 我が剣の下に来られたし」  
これがメールの本文だ。ご丁寧に、自らの存在を誇示してやがる。だが、注目すべきは最初の文。

これは、俺の生前を知っているとも捉えられる。その場合、こいつは何をしでかすか分からない。

だから、本当に”知っている”かどうかを確かめる必要があった。

「ある人物からの情報だ。私にそんな力は無い、精々お前を誘い出し、こうする位だ。」  
「なっ、その声は遠山………って、うおあつ!？」

歪な音声が突然知り合いの声に変ったかと思えば、次の瞬間には壁の方まで吹っ飛ばされていた。しかも……

「ぐっ、変声術…… 何!? 氷だと!？」

動けねえと思つたら、両手足が壁に張り付けられていた。それも、凍らされてだ!  
「怯える必要は無い、殺しはしないからな。」

奴が近づいてきやがった、その姿があらわになる。お、女、だったのか…… いや、それよりも……

「誰が脅えるかよ、唯々不条理な運命って奴が憎たらしいを通り越して笑えてくるだけ

だ。まさか、あの氷剣士だったとはな。それに、殺しはしないだど？」

「当然だろう？　星伽の巫女と共に、伊・Uに行くのだからな。」

伊・ウー：　　理子達と同じ構成員だったのか、なるほどな：：

「そういうことか：　何？　星伽会長だど？　近くにいますのか!？」

「ふっ、これから彼女を迎えに行く。お前はそれまで大人しくしている。」

そう言つて、あいつは奥の方に消えていった：　　何やつてんだよ、遠山：　！

・・・つて、人のこと言つてる場合じゃねえ！

「ええい、クソツッ！　まだ掛かるか：　！」

かれこれ30分位経つたのか？　今は、何とかこの厄介な氷をどうにかしようかと奮闘している。

あいつは、手足を塞いで完全に捕らえたつもりでいたが：：

「ナイフを取られなかったのはラッキーだったな。」

そう、俺は吹っ飛ばされる前から右手にヒートナイフを構えていたのだ。

もし、あの戦闘でこいつの機能を見せていたら、真っ先に奪われていたに違いない。だが、現に取られてはいない。ナイフの放熱で右手回りの氷を徐々に溶かしていく。



「もう、少し：：！ シャオラアアアアッ！」

漸く右手が解放された！ すぐさま左手、両足の氷を砕く。

これ位、チタン合金ならどうってことは無いっ！

「だあつ！ やべえな、凍傷になってるかもな：： とにかく、増援が必要だ。1人、2人でどうこう出来る相手じゃない：：」

「ほう、そう簡単に振り切れると思ってるのか？」

「チツ！ 戻ってきやがったのか！ てか、会長を迎えに行ってたんじゃないのか？」

「少し不測の事態があつてな、計画を変更したのさ。」

.....

「.....いや、不測の事態じゃなくてお前のミスじゃないのか？」

「.....。」

いや、だってそうだろ？ 俺のナイフにしてもそうだし。

.....あ、やばいなこれは：： 無言で剣を構えたぞ、あいつ！

「私の計画に狂いは無いっ！」

「いや、現在進行形で狂ってんじゃねえかあ!!」

俺はアーマーブレイカーを引き抜く! 衝突、2つの刃がぶつかり合う。

さすがはカーボノックスで造ったブレード、チタンなんかの比じゃねえぜ!

とは言え、完全に耐え切れる保証は無い。

衝撃を受け流しつつ、凌ぐ、凌ぐ……! 凌ぐ!!!

クソツッ! だが、やはり強い! それに、手足の感覚が無くなってきた。限界が近いな……

「ふっ、やはりリユパンIV世が目をつけていただけのことはある。」

「……分かんないな…… 魔剣(デュランダル)、お前は…… いや、イ・ウーは何の目

的で俺を……」

「その名で呼ぶな。どいつもこいつも…… 私はジャンヌ・ダルク、”30代目”ジャン

ヌ・ダルクだ。」

!! アーマーブレイカーが弾かれた! 折れてはいなかった様だが、かなり遠くまで

飛ばされてしまった。

ここの一番の振りが俺に襲い掛かる、どうやったってこの状態から刃を受け止めることなんて出来ない。

だから、俺はもう一つの策として背後に持っていた超磁石を手にし、それで剣を挟んで受け止めることにより無理矢理“白刃取り”の様な状態を作り出した。

「ジャンヌ、ダルク…」

「お前は我々のことを理解出来る筈だ、J・マックス。幼き頃から力を求め、社会を変えたいとは思わなかったか？ 酷く理不尽な世の中を正しく作り直したいとは思わなかったか？ 力があれば世界すら変えられるし、失うことも無い。伊・Uに来れば、それが手に入る。人を騙す術も、超能力さえもだ。」

！ そうか… こいつの変装や変声術も、理子の…

「来い、J・マックス。お前は資格がある。その可能性、我々の力となれ。」

…

…

…

「実に見事な演説だな。それもお前の血筋故か？」

「意外だな… お前ならすぐに乗ってくると思っていた。自らの正義に従い戦っていたのではないのか？」

「そんな御大層な正義感で武偵になったわけじゃねえよ。いつ何時も、俺が戦うのは俺自身の為だ。」

・・・建前だな。自分で言ってる矛盾してるのはよく分かってる。今までそう思ってた生きてきた、それだけのことだ。

だから、『仲間を信じ、仲間を助けよ』つつう言葉が理解できなかつた。

「そうか・・・ まあ、無駄な足掻きだったな。」

だが、今ならそれを・・・

「ジエイ君！」

「くっ!!」

「星伽会長!?!」

重圧がのしかかりもう無理だという時、現れたのは・・・

星伽会長だった。

暗器で牽制しながら、俺の側まで来た。

「分が悪いか・・・ ここは退こう。」

状況を不利と見たのか、あいつは奥へ行ったようだ。

磁石は外されていた、あいつとんだだけ力あるんだ・・・

デカイ剣振ってる時点です

げえが。

「じつとして！ 今、治すから・・・」

「ああ、済まない。会長の方こそ… 無事、なのか？」

「刀は取られちゃったけど、キンちゃんとアリアのおかげでなんとかね。」

「あいつ等が… そう、か…」

てことは、まだあいつ等は魔剣… いや、ジャンヌ・ダルクと戦っているのか…

「…行ってくれ、会長。俺はもう大丈夫だ。」

「で、でも…」

「魔剣はまだ余力を残している筈だ。それに、遠山にはあんたが付いてないと駄目だろ？」

「っ!! …分かりました。必ずキンちゃん達を助けるから…!」

星伽会長は、そう言う俺を残してジャンヌ・ダルクの後を追った。

残った俺は壁に寄り掛かり、身体全体を預ける。

「流石、に… 疲れた、ぜ…」

そのまま、俺はかなり深い眠りに入ってしまったようだ。

「……くん、ジエイ君！」

「おい、ジエイ！」

「……んあ？ 遠山、会長か……」

すっかり寝て落ちしてしまつたみたいだ。余計な心配させちまつたか？

「大丈夫、だ。それより、やつたのか？」

「ああ、白雪のおかげで魔剣も無事に逮捕できた。」

「そ、そそそんな、わた、私のおかげだなんて…… お、恐れ多いです！」

「おい、落ち着け！」

「そうか、やつたか……」

何にせよ、ちゃんと解決したみたいでよかつたぜ。

「それから、ありがとな。」

「ん？ 何がだ？」

「直接的では無いにしろ、お前のおかげで白雪の下まで辿り着けたようなもんだしな。」

「ははっ、本当に俺は何もやっちゃいないがな。」

俺達は、友情を確かめ合うように握手を交わした。

その後は、アドシアードも問題無く閉会式を迎え、俺の行動に関しても不問という事になり、地獄のフルコースは回避された。

こうして、俺の長いようで短かった警備任務はようやく終わったのだった。

## File. 12 刺客

よう、元気にしてるかお前ら。最近、色々と厄介な問題が起きて疲労感がヤバいJ・マックスだ…

イ・ウーの魔剣ことジャンヌ・ダルクが逮捕されて、漸く俺の生活も落ち着きを取り戻すかと思いきや、どうもこの世界の神つて奴は思い通りの展開はお望みじゃないらしい。

「みんなー、お久ー！」

つい先日まで行方知れずだった、峰 理子が帰ってきたのだ。

まさか、こんな早く姿を現すとは… 流石の俺も呆気にとられた。

表向きは海外での長期任務という事になってたが、あいつの正体を知る俺や遠山がいるのに堂々と出てこれる筈が無い。

おそらく司法取引か何かをしたんじゃないやねえかと遠山に話してみれば、案の定そうだったようだ。

それどころか、彼女は遠山・神崎コンビを使って何かを始めようとしてるらしい。

…まあ、そこら辺は俺には”全く”関係無いからどうでもいい。





おもむろに、その唸り声と言うべき音が聞こえた方に目を向ける。

・・・デカイ。見た時、1番最初にそう思った、2匹の白い獣が鋭く眼を光らせこちらを睨んでいる。

無意識に、俺は近くにあつた武装籠手を手に取つた。だが、その瞬間を見計らつたかのように2匹は一気に俺に向かって走り出した！

「うおおおおおおおおお！」

おいっ！ ふざけんじゃねえよ！ こいつは一体何の冗談だ!?

とにかく、一刻も早くここを離れなければ！ 俺は点検の終わつていたスレイプニルに飛び乗つてエンジンを吹かす、そう言えばキー付けっぱなしだったが今回はそれが幸いにも役立つた！

急いで車輛科倉庫から出る、この狭い所じやどうやつても数で劣るこつちが不利だ！ あれは、狼だよな？ しかも、何かかなり珍しい奴だった筈だ、よく知らねえけど、まあ、今は奴らを引き離さねえことには始まらない。こいつの馬力を持つてすれ

ば……

「……つてあいつ等、70 km/hでも追いつけるのかよっ！」

普通のバイクより断然速い俺のスレイプニルにここまで追隨するのか！ チクシヨウ！

人目につく処には出ていけない…

こうなったら、埠頭エリアまで行くっきやない。今なら、人はいない筈だ！

チツ、それにしても何で俺があのだか狼に追われなきやなんねえんだよ。

どこに、都会の中心に居ながら猛獣に襲われる奴が居るっていうんだ！

俺は飼育員でも、サーカス団員でもないんだぞ…

魔剣の件で厄介事は終わったんじゃないのかよつ！ まだ、俺は狙われてるってのか！

「死んでたまるかあああああつ!!」

何とか、埠頭までは辿り着いた。予想通り、人影は見られない。

だが、依然不利な状況には変わりない。

2匹に対して俺は1人で、武装がよりによって近接武器。相性は… 完全な不利とは言わないまでも、微妙なところだ。

攻撃するには接近が必要だ、しかしそうすれば当然ながら致命傷を負うリスクが高くなるわけで…

「で、向こうはそんなことは微塵も考えてねえな!？」

再び襲い掛かってくる狼達を、巧みなバイク捌きで避けていく。

この間に、打開策を…

が、ここで思わぬ問題が生じていたことに気づいた。

「しまっ!? ガスが無え!!」

実は、ガソリンは最後の最後に入れてしまおうと思っていた為、残量はあと僅かだったのをすっかり忘れていたのだ。

これじゃあ、逃げの一手が続かない! と、そこに奴らが後ろから飛び掛かって来た。覚悟を決めた俺は、横に飛んで転げ落ちる。と、すぐに体勢を修正して立つ。

バイクは、減速しながら進んでいって倒れた。

1匹が真っ直ぐにこちらへ向かって来る。

傍らには、丁度良く木材が置いてあるじゃねえか！

すかさずそれを手に取った俺は、棍棒の要領で鋭い突きを出して牽制する。

向こうも、俺に隙ができないんで攻めあぐねている様だ。

だが、すぐに2匹目もやって来た。しかも、そいつは俺が牽制しているのも関係無しに飛び掛かって来やがった！

俺は思わず木材を盾にしてしまった。勢いよくかぶりついたそいつは、力に物を言わせ木材をへし折りやがった。

何つう顎してんだよつ！ あれは、余裕で骨が折れるに違いない…

また、俺を眼前に捉えた狼達は今度は取り囲むように俺の周りを回り始めた。

…隙を伺ってやがる。無闇に攻めてこないところに、こいつ等の知能の高さが分かるな。

俺も最大限に感覚を研ぎ澄ませる。緊張はピークに達する。

「…ぶえああつくつ！」

やつべ、こんな時に… それを合図に、奴らが双方から襲い掛かって来る！

俺は、右の1匹を籠手に噛ませ、左の1匹は下顎からアッパーを食らわせた。

左の奴はいいのを1発貫ったのか動きが怯んだ、その隙に右の奴に全力の強キックを

食らわせた。

その巨大な凶体が面白いように吹っ飛んだ。おっほ、こいつは予想以上に重いな…しかもすげえ耐久力だ、結構な力でやったにも関わらずまだやる気だぞ！

「こりゃあ、”アレ”で決めるしか無いな…」

この武装籠手は、別にある仕込み籠手とは違い武器を内蔵していない。

ある機能以外は、チタン合金製になった籠手だ。

再度奴らが俺を取り囲み、双方同時に襲い掛かる！

(見える、俺にも見えるぞ…)

今の俺は、度重なる戦闘の末に飛躍的成長を遂げている。即ち、奴らの動きがよく分かる。不本意ながら！

俺は、2匹の開かれた口奥を掴むように同時に持った！

「痺れなっ！ 糞犬!!!」

猛烈な電撃が籠手を通して流れる。籠手にある機能とは、物凄い強力な超高電圧の発生である。

奴らはそれをモロに食らった、なのにまだ奴らは立ち上がる。

流石に、これ以上の長期戦は避けたいところだが…

だが、奴らは俺を威嚇するように吠えた後、戦闘続行は無理と判断してか負傷してるとは思えない速さで走り去っていった。

いやあ、危なかつたぜ。．．．まあ、あいつ等を放置する方がマズいが、取り敢えず注意喚起をしてもらおうか。

『狼？ お前もだったか！ しかも、2匹．．．』

「？ そりゃ、どういうことだ？」

『ああ、俺はその場になかったが、再検査が行われてたのは知ってるよな？ であろうことか、そこにはロツカーに隠れた遠山と武藤が居てだな、奴ら揃いも揃って女子連中を堂々と覗いて．．．』

おいおい、話がズレて行ってねえか？

『．．．つと濟まない。そこに、窓から突如大型の狼が突っ込んで来たんだ。種類は多分、お前が見た奴と同じだ。室内で暴れた後、狼はそこから離脱、遠山とレキが追撃してそ

したら…。」

「そしたら…？」

『何と、レキの奴がその狼を手懐けやがった。』

「…マジか？」

『マジもマジ、大マジだぜ。それと、お前を襲った2匹に関してだが足取りが掴めない。

こりゃ、搜索は困難だろうな…。』

「そうか、分かった。こつちでも、調べてみる。」

『ああ、何かあつたらすぐ呼べよ！』

「ああ、頼りにしてるぜ、柴田。」

結局、奴らの手掛かり無しか…。

だが、遠山の方も同じようなことがあつたとはな。

同時犯行？

しかし、今はこう思う他無い。

「また、遠山絡みか…。」



「血は得られませんでしたか…： まあ、いいでしょう。機会は幾らでもあります。」

画面に映るのは、遺伝子の組織構図。それが、幾つも画面に映されている。

それは、傍から見れば異様な光景だが、その前に立つ者はこれをまじまじと見て再び歪な笑みを浮かび上がった。

「彼の遺伝子は素晴らしい！ 何としても、私のものとしなければ…：」

事態は、ゆっくりと動き出していた。

その牙は、確実に彼の喉元に突き立てられようとしていたのだ。

## File. 13 血の宿命

「結局、狼探しは打ち切りになっちまったな。」

「・・・ああ。」

「まあ、レキのこの奴でもあれだけ巨体なのに、それが見つからないとなればもうここにはいない結論になるよな。」

現在、俺（J・マックス）と柴田、でんごろうの3人は校舎裏にて暇を持て余していた。

自由履修の車輛科の講義が早くに終わったんで、俺達は何をするかという話になったんだが・・・

外は生憎の雨、任務に関してもめぼしいものは無し、最近はずしく緊急案件も無い。

狼搜索も打ち切られたし、マジで今はやる事が無い状態だ。

ここに居るのも、何となくって感じでやって来たもんだからなあ・・・

「・・・どうするよ?」

「俺は、どうだかな。」

「うーん、なら装備科に戻ることにする。依頼が来てるかも知れないからな。」

「そうか… んじゃ、俺も適当に依頼の確認してきますか… また後でな、ジエイ。」

「また、後で。」

「おう、分かった。」

さて、どうしたもんか…

【うおおおおおおお!!】

ん? (限りなく身の危険を感じる気配)

「どおりやあああつ!!」

「ぐっほおあつ!!」

うおおお!! 何だ、何だおい?? 何が起こった? めつちや痛いんだが、背中の辺りが。誰かが頭から突っ込んで来やがった。てか、本当誰だ!?

「お前かあ、J・マックス!」

「ぐっ、何で俺の名を… 全く見たことねえ… 女!?! おい! 何時までも馬乗り

になつてないで離れろや！」

「全く：．．． あまりここでは目立ち過ぎないでほしいわね、姉さん？」

「うぐつ、妹の言うこととあつては仕方ないか：．．．」

「やれやれ、．．．つて妹？」

思はず俺は声がした後ろの方に目を向けた。

それというのも、俺はその声に聞き覚えがあつたからだ。

「久しいな、と言つても数日前のことだが。」

「また会つたわね、死にぞこないさん。ここでは、ジエイ先輩と言つた方がいいかしら

？」

「なつ、ジャンヌ・ダルクに夾竹桃：．．． つーことは、こいつは捕まつたもう一人の方の

水蜜桃!」

「ジャンヌでいいぞ。ここで話すのも何だ、場所を移そう。」

「あ、ああ、分かつた：．．． 後、お前その呼び方は理子に色々と弄られるからヤメロオ！」

まさか、こいつ等まで来ていやがつたとはな：．．．

ここへ来た表向きの理由に関してはそれぞれ違つたが、いずれも司法取引をしてはい

るらしい。

理子もそうだが、こうも堂々と目の前に出て来られると警戒せずにはいられない。

4人中3人には命を狙われたようなもんだからな!?

それから、夾竹桃と水蜜桃は本名の鈴木 蜜子・桃子で通っているらしいんでそう呼んでくれとのことだ。

後、ジャンヌの奴が妙に馴れ馴れしい。

んで、俺等は場所を移し空き教室の1つに入っている。

さつきから座ってる俺を水蜜桃がジロジロ見ながら周りを回ってるのがすげえ鬱陶しいんだが…

「で? ジャンヌやお、一体何の話があるってんだ?」

「警告だ。お前はもう伊・Uに深く関わってしまった。だから、心構えはしておいた方がいい。何時何処で目を光らせているか分からんぞ。」

「なつ、馬鹿言っちゃいけないぜジャンヌ・ダルクさんよお。俺は、お前らと理子の所為で強引に舞台上へ引つ張り出されたようなもんだぞ。それが、何だってそこまでの大事になるってんだ!」

「全てが思惑通り、だとしたらどうだ?」

「んなつ… はあ?」

「前に言ったと思うが、私はお前の情報がある人物から教えられ、その人物の助言によりお前を誘い出した。」

「・・・それが何だつてんだよ。」

「実を言うと、その人物が最初から全てに関わっていた節がある。」

あ・・・ ああ？

「現に、お前は我々との戦いで生き長らえ、その度に強くなっている。」

何処の戦闘民族理論だ、そりゃあ・・・

・・・つてそうじゃねえ！

「いやいや、待て待て！ 話が全然見えねえぞ・・・ 第一に、お前の言ってるそいつは誰

なんだよ！」

「それを知るには、伊・Uのことを知らなければならぬ。ま、どの道後戻りは出来ないから聞こうが聞くまいが結果は変わらんがな。」

「・・・分かった。」

誰でも確実に分かる。これは明らかに、踏み込んだりいけねえ領域に突っ込んでいつて・・・

・・・まあ、俺の行動がどうであれ、理子に目をつけられた時点でこうなるのは決まっていたのだらうなあ・・・ (達観)

だが、今後起こるであろう不幸を見据えている故に、俺はただ黙って話を聞くしかなかった。

「・・・こんなところか。」

「は、ははは・・・」

聞けば聞く程、伊・Uって奴らは怪物揃いだ。

こいつ等よりも強い奴らがいると聞いた時は、流石に耳を疑ったぞ。

俺の見解としては、とにかく超が付く戦闘に優れたイカレ集団、って感じだ。

教授って奴がトツプらしいが、どうやらその教授が俺のを知り、これまでの面子を差し向けるようにした張本人らしい。

・・・聞いてもさっぱり理解できなかつた。やはり、教授って奴が1番おかしい、という結論には至つた。

てな感じでここまで話を聞いてきた訳だが・・・

話し手であるジャンヌが、何とも形容し難い絵を出して話すもんだから全然集中出来なかった。

夾竹桃のフォローが無けりや、匙を投げてる所だったぞ…

「結局、教授って奴の意図が全然分かんねえな… これじゃあ、俺が擬似的に伊・Uにいたみたいじゃねえか。」

「あの人の考えは私達にも分からないのよね。だから、今度のことにも意味がある筈だけれど、生憎そこまでは答えが出ないわ。」

「全く、お節介が過ぎるってんだよ…」

戦闘集団なんかに身を案じられたら、本当に世も末だ。

10000m上空から落っこちて、毒にもがき苦しんで、文字通りの真剣勝負して、もう散々な目に遭って来た。

だが、これ以上は無い筈、そう高を括っていた。が…

「嘆いている暇は無いぞ。お前は既に狙われている。現N0. 2、今遠山達に関わっている、”無限罪のブラド”だ。」

「はっ!? 冗談だろ…?」

「冗談では無い。あの狼に襲われたのがいい証拠だ。」

「あれは、そいつの差し金だったのか…?」



超能力者と戦ったのも束の間、今度は組織のNo. 2からのアプローチと来たもんだ。

教授は、よっぽど俺を死なせたいらしいなっ!?

「いや、ブラドに関しては教授は手を出していないと思う。おそらく、ブラドの独断だろうな。何が目的かは知らんが。」

「今度という今度は生き延びられる自信が無いんだが…?」

「そうかしら? 貴方の実力なら、ブラドにも対抗できると思うけど。」

「んなこと言われてもな… ぐあああっ!?!」

「我が妹の言うことにケチつけんじゃねえ!!」

「ぐおおお… 分がった、分がった! 手を放せえっ!!」

畜生、首が潰れるところだった… こいつ、シスコン姉貴かよ…

伊・Uにいた奴から言われたからといって、早々打ち倒せる相手じゃないのは明白だ。何せ、俺がこれまで戦ってきた奴らより遥かに強いってことなんだからな。

「ま、まあ… その時になって呆気なく死なないように、備えてはおくさ…」

「待て、最後に1つ。お前にも教えておく事がある。」

「??」

「これは、遠山にも言った事だが… もし、ブラドと戦うとなった時、ただ闇雲にやり

合つても奴には勝てん。」

「は？ 対抗手段も無いんじゃない、勝つことなんて不可能じゃねえか。」

「慌てるな、奴も無敵じゃない。奴の体には、その昔にバチカンの聖騎士につけられた一生消えない紋様がある。全部で4つ、1つの場所は分からないが…… 要はそこが弱点だ。」

そう言われて、何か描かれた紙を渡された。ジャンヌ曰く、遠山に渡したのと同じブラドの全体像らしい。

……これは、何だ？ 明らかに人間じゃねえじゃんか…… そんな奴が敵と来れば、いよいよもつて俺も未知の領域に仲間入りだな。笑えねえぜ……

改めてそいつをまじまじと見る、確かに3つの目玉模様みたいなものが描かれていた。

しかし、まあ……

これ等と、もう1つの弱点を同時に撃ち抜かなければいけないらしい。

文字にしてみれば至極簡単そうに思えるが、同時攻撃というだけでもキツイのに、何処にあるかも分からないもう1つのウィークポイントを探さなきゃなんねえ。

今まで以上に無理難題を押し付けてくる奴だぜ、おい。攻略法はあるのか？

「……まあ、参考にさせてもらおう。」

「それから、これは個人的な頼みだが：．．．もし彼女、理子が窮地にあつたなら、助けてやっってはくれないか？」

「随分いきなりな上に、身勝手じゃないか？ お前や理子は、仮にも俺と敵対したんだぞ？ それが、何の因果で敵だった俺にそんなことを頼む：．．．」

「しいて言うなら、縁、と言う奴だろうな：．．．我が一族の双子の3代目ジャンヌ・ダルクと初代・リュパンは、当時のブラドとの戦闘の末に引き分けている。つまり、私にとつてもブラドは因縁の相手ということだ。」

「．．．それは、血族の関わりからか？ それとも、伊・Uの仲間としてか？」  
「いつも以上に鋭く尖った視線を向ける。これだけははつきりさせておきたい。」

俺は仕事をする上で、命を張るのに納得のいく理由が無ければ動きはしない。  
そして、彼女が出した答えは：．．．

「友」としてだ。」

一切迷い無く、そう言つてのけた。．．．あいつにも、友がいたとはな。

そうとなれば、俺も覚悟を決めるつきやない。最悪、そうなればの話だがな。  
去り際に、俺は背中越しに堂々と言つてやった。

「俺は高くつくぜ？」

すっかり時間が経ち、放課後の狙撃科練習棟。

時間の関係もあり、1人を除いてもう残っている生徒もいない。

誰もいないかの様に静かな空間で、響く銃声だけが存在を示唆していた。

「驚いたな。」 いや、確かにまた連絡すると言っただけはいたが、本当に掛けてくるとは思っただけだったんだ。」

「……。」

俺は、その練習棟にて呼び出しを受けた人物の下へと来ていた。背にかなりの大型銃を持つて。

『X M 1 0 9 ペイロード』の独自多目的戦闘拡張カスタム、早い話が対物ライフルだ。

不殺生が常の武偵としては、R P G ー 7より使い勝手が良いんで所持している。

「んで、内容を聞いて無かったんだがどうして”コイツ”が必要だったんだ？」

何せ俺がこのペイロードを持つて来たのは、電話口で狙撃銃を持つてくるように言わ

れたからだ。

今の所、まともに使つてたのがこれしか無かつたんでコイツを担いで来たのだ。

無言で構えていた体勢から立ち上がったレキは、ただこう言ったのだ。

「・・・風が、貴方を導こうとしています。」

出たぞ、レキの言う風の御告げが・・・

こいつ自身何を考へてるのかは全く分からないが、本人は「風」と呼ぶ何らかの声か聞こえていて、それに従つて動いているのがほとんどのようだ。

俺自身、その御告げの凄さは身を以つて知つている。

去年の終わり頃、誰にも行き先を伝えずバイクで襟裳岬に出かけた俺の下に、何の情報も無く教務科より頼まれた物を持つて現れた時は鳥肌が立った。

何故分かつたかと聞けば、「風が、導いてくれます」とのことだつたんで、風つて奴は神様か何か？（地味なフラグ）・・・みたいなことを思つた程だ。

まあ、結局何が言いたいかというと、この御告げに従つて損は無いということだ。

「ヤッパ・・・」

俺は、腰を落として奥にある的の1つを狙う。どうせ、ここに引つ張り出されたのも意味がある。

照準、そして撃つ！ 重厚な発射音で吐き出された弾丸は、的から大きく離れた位置

に着弾。

「チツ、鈍ったか？ 最近めつきり使ってなかったとは言え、こいつはひでえな…」  
すぐさま修正に掛かる。・・・今度は命中。次、これも命中…

「よおし、こんなもんか…」

一通り感覚は取り戻した。あの状態で戦闘になってたら、間違ひなく命に関わるミスをしていたかもしれねえな…

「済まないな、レキ。また、御告げに救われたようだ。この借りはいつか返す、じゃあな。」

「…」

そう言つて、俺は再びパイロードを担いで練習棟を後にしようとした。

・・・が、非常に珍しいことに、レキが俺に対し言葉を発してきた。

「貴方はここで死ぬべきでは無い…」

「…へっ、死んじまったら、借りも返せねえしな。まだ、死ぬわけにはいかねえさ…」  
そう返して、今度こそ俺は帰路についた。

どうやら、俺にとつての運命の時はそう遠くはないように思える。

決戦を控え、俺は家にある「フル装備」の最終チェックをする為に急いで帰つていった。

「……彼に行く先、貴方は何を見るのか……」  
いつの間にか、練習棟には誰の姿も見えなくなっていた。

## File. 14 Judgment

暗がりに敵は潜むもの、夜の闇は全てを覆い隠してしまう。

「ハイ・ドウ、運用に支障無し。このまま警戒を続行。」

タンDEM・ローター式の大形武装へりに乗り込み、漆黒の全身装備に身を包んだ男は東京の街を見下ろす。

いつ訪れるとも分からない、怪物との戦いに備えて…

………

「ん？ これは…」

その時は、訪れたのだ…

「あの辺りか…」

ゆつくりと針路を変えていくへりの中で、彼は本能的に異変を感じ取っていた。



ランドマークタワー屋上、事態は急展開の様相を呈している。

これまで、峰 理子主導によるお宝と称した目標の奪取を行っていた遠山 キンジと神崎・H・アリアは見事作戦を成功させ、目的の物を手にした。

この場所にてその受け渡しを行い、次は神崎の提示した要求を… という時に理子がまさかの裏切りでどうなるか、となっていたその時だった…

「があっ!!」

「・・・っ!!」

「小夜鳴先生!?!」

予想外の人物が現れた、遠山達が潜入していた屋敷にいた筈の小夜鳴 徹だったのだ。

「動かないでください。お2人が妙な動きを見せたら、襲うように仕込んでありますので…」

彼は、倒れ伏して動かない理子に近づきながら空を見る。

「さて… ふふっ、どうやら彼も来たようですね。」

「?」

彼らも思わず視線の先を見る。

上空に浮かぶ大型のヘリの姿、そこから何か飛び出してくるのが見えた。宙を舞う影は、徐々に大きくなりながらこの場所へと近づいてくる。

ムササビスーツのようなウイングを開き滑空して来たそいつは、最上段のヘリポートへ足から火花を散らして降り立った。

「これで、役者は揃いました。彼にはどうしても接触する機会が欲しかったので、少し細工をさせてもらいましたよ。」

「何?」

「テメエか、小夜鳴。俺の秘匿回線に発信信号を流したのは、あからさま過ぎて逆に来ちまったぜ。」

全身を重武装で覆っている見るからに怪しい奴が上から顔を出したが、その聞き覚えのある声に遠山はすぐに感じた。

「ジエイ、お前か。」

「よう、遠山。横浜の方に行つて以来、久方ぶりじゃねえか。ま、この状況じゃ、そんなこと言つてる余裕もねえみたいだが。」

「ジエイツ?!」

フルフェイスマスクを外して素顔を見せたのは、J・マックス。小夜鳴が呼び寄せたのは、他でもないJ・マックスだったのだ。

「何が目的なんだ？ その狼がいるってことは、お前が”あいつ”の手駒だってことは分かるが。」

「彼女達から聞きましたか… まあ、いいでしょう。ふふっ、何… 彼らのお遊戯会に少し付き合っていただけのことです。彼女の様子では、10年前に私と会っていることも忘れてるようですが…」

「お、まあか、ブラドに余計なことを吹きこんだのは…」

「ええ。そうだ！ この際、貴方達にもお教えしましょう。検査の結果、リュパン家の血を引きながら彼女には…」

「や、やめろお…！」

「優秀な能力が遺伝していなかったんですよ。つまり、遺伝学的には全くの”無能”。こいつ… 本能的に分かる、こいつは本当にいい趣味してやがる。見てるこっちは身震いする位には…」

「それに比べて、J・マックス！ 超能力者にも勝るとも劣らない、その優秀な遺伝子！！ そう、君こそ私が求めていた存在だ!!! 本来ならそれも既に手に入っていた筈でしたが、いやはや貴方の力には驚かされました。」

「遺伝子？ そう言われて、1番最初に思い浮かぶのと言ったら爺神に与えられた、この”万能で高身体能力の肉体”だ。」

だが、遺伝子を得た所で一体何になる？ クローンでも作る気か？

しかも、その間にも小夜鳴は理子を足蹴に痛めつけている。嗜虐行動としては理解でききるが、今それに一体何の意味が…？

「い、いい加減にしなさいっ!! 理子を虐めて、何の意味があるって言うの!?!」

「絶望が必要なんですよ。彼は、絶望の歌を聞いてやってくる…!」

「…ッ! これは!」

遠山の奴も何か感づいたようだ。そう、この感じは遠山の持つ”アレ”によく似ている…!

途端に辺りの空気が一気に変わった気がした、奴を中心にして大気が震えているのを感じ取った。

「さあ… ”彼”が、来たぞ?」

それは、まさに”化け物”と言うに相応しい姿だった。なるほど、確かにジャンヌのアレはあながち間違いじゃ無かった。

見た感じで言えば、月に照らされ正体を現した狼男みたいだが…

「ブラドツ!! ママの冤罪の99年分はアンタの罪よ!! 逮捕して証言台に引きずり出

してやる!!!」

「・・・威勢がいいなホームズ家の娘、お前の血もいただいておくべきだったぜ。今からでもその喉首に牙立ててやる。」

「・・・! そうか、ブラッド! アンタの正体は・・・ 吸血鬼、ドラキュラ伯爵!!!」

まさか、吸血鬼とはな・・・ だが、それを踏まえればこれまでの事にも納得がいく。

進化した吸血鬼か・・・ 弱点すら無いなんぞ、俺らの手に負えるのか?

いや、いずれにしろこいつを倒さなきゃ意味が無い。

—無理を通して道理を通す— 吸血鬼だろうが狼男だろうが、殴り倒してやる・・・!!

完璧だった。何もかも、思い通りにいっていったと、そう思っていた。

だが、それも全て無駄だった? あの男がいれば、また違ったのか?

今更、全てが遅過ぎる・・・ だが、どんなに傷だらけになろうと・・・ 生き恥を晒そ

うと・・・ 死にたくない、あの男のように足掻き続けたい・・・!

「助け、て・・・ キンジ、アリア・・・ ジェ、イ・・・」

その答えは：・

「言うのが遅いつ!!」

最早、言うまでもないだろう。

瞬間、アリアがブラドに向かって真つ先に動き出す。

同時に遠山が襲い掛かってくる2匹を撃ち：・ いや、無力化したようだ。

大したもんだ、この土壇場であそこまで器用なことが出来るなんてな。それでこそ、あいつというものだ。

素早い動きで一気に接近したアリアが、奴の両肩を思いつ切り斬りつけた。

遠山はブラドの手から離れた理子を抱えてヘリポートまで上がって来た。見るからにあいつの姿はボロボロだ。

別に同情する訳じゃない。俺も孤独を経験したが、あいつ程のものじゃない。

そう、これは：・ あいつの『友』に頼まれたからだ、救ってくれってな：・ !

「ジェー！」

「あいよっ!!」

構えたX M 1 0 9   パイロードが火を噴く。腕に当たった榴弾は、その肉の半分を消し飛ばした！

が…

「なっ?! なんつう再生力だっ、もう傷が元通りになつてやがる!」

肉が飛び散つたにも関わらず、その腕は何も無かつたかのように再生してしまった。

これが奴の、吸血鬼としての力か…!

その一瞬だった。いきなり目の前が暗くなつたかと思いきや、ブラドが投げつけてきたコンクリートの塊が目前にあつた。

「ぬうおあっ?!」

間一髪、驚異的な反応速度でもつてそれを避けて見せた俺にブラドは言う。

「ゲババババツ! やはり、お前も素晴らしい遺伝子の持ち主だ!! その血を手に入れば、俺は更なる力を手にできるっ!!!」

「俺の血を? 止めとけ、この呪いの力を得た所で後悔するだけだ。」

「究極の生命力を持った優性遺伝子が目の前にあるのに、逃すと思うか?」

「…どうしても欲しんなら、1度死んでみるこつた!!」

再び、ブラドがコンクリート塊を投げってくる、俺はそいつをペイロードで砕いていく。

俺の開発した特殊榴弾は、巡洋艦の榴弾砲と同威力。コンクリート位、容易に吹き飛ばす!

「グルアアツ…!」







「違うな：： 人の本質が能力や遺伝子で決定付けられるなら、当の昔に人には失望してるさ。重要なのは、そいつが”己の意志”を持っているかだ。人でもない、自らを偽り、他人の生き血を貪るしか能の無いお前に、理解できるわけないだろうがなっ!!」

「面白れえ! なら、先ず貴様の血から貪り尽くしてやるぜっ!!!」

「やられっ放しはもう終わりだ、クソツタレ!!!」

「ジエイ! もう一度奴を狙う、引き寄せてくれ!!」

「・・・っ! 了解した・・・!」

「また、悪足掻きか。無駄なことを!!」

「いや：： こいつは、マジだぜ!!!」

..... 3

..... 2

..... 1ツ!!!

3人の放った4つ弾丸、それは確実に奴の身体を捉えていた。

奴は油断しきっていたのだ：： だから気づけなかった。



「ねえ、そう言えばジエイは？」

「? . . . 確かに、見当たらないな. . .」

. . . . .

. . . . .

. . . . .

「やれやれ. . . 弾代含めて、色々請求しないとな. . .」

当の俺はあいつ等が探していることなどつい知らず、一足先に屋上から降りていた。

まあ、あそこからそのまま滑空して来たんだけどな。エレベーターは面倒になりそうだったし. . .

後は、報酬を頂いて全ては終わり、これで教授も諦めてくれりゃあ万々歳なんだが. . .

「ジューイーッ!!」

「はっ? うおっ?!?!?」

真上から声がしたかと思えば、次には今までに体感したことのない何とも絶妙な感触の物体が重力と共に覆い被さって来た。

空から女の子がっ!!? . . . 何て、ロマンティックシーンかと思ったか? この世界で女が降ってくるなんて普通だぞ? (感覚麻痺)

しかも、それが超絶ビッチ怪盗ともなれば、悪夢な事この上無い。

「馬鹿かテメエはあ!! どけっオラア!!!」

「うわつとと. . .」

さっさと投げ飛ばして起き上がる、するとそこには先程とは打って変わった雰囲気のないものが立っていた。

「. . . . .」

「. . . 何だよ. . . 戦いは終わっただろ. . . まだ何かあんのか?」

「その. . . 一応、お礼を言っておきたいと思っ. . .」

「あ? 何のこつたよ。」

「そう. . . たとえ、それがジャンヌの頼みってだけの義理だったとしても、助けられた、わけだし. . . それに. . .」

知ってたのか。本当、変なところで耳がいいんだよな。

「だったら尚更、それを俺に言うんじゃないよ。」

「・・・え？」

「俺は手を貸してやったに過ぎない、その言葉はお前の“友”に言ってやれ。」

格好つけてるわけでも無いし意地つてわけでも無い、これが俺の考え方だ。

信じられる人が居なかったからこそ、それを大事にしろよという、俺なりのメッセージ。  
ジゼ。

「ふふつ、やっぱりジエイは優しいね。」

「柄にも無えこと言うんじゃないよ。」

「ねえ、ジエイ。」

「あ？ なん・・・。」

俺が次の言葉を発することは無かった。

不意にだった。予想外のことに、俺は意識が追いつかなかった。

生前では、女に触れることさえも無かったというのに・・・

まさか、まさかこいつと・・・

結構な体格差があった筈なのに… 顔が近過ぎるっ!!!

「ジェイは2番目だけど、今はこれが私に出来る、お・れ・いっ!」

「…ハッ!?!」

「オルヴオワールツ!!」

気が付けば、あいつはもう豆粒位に見えるまで遠くに行っていた。

…なんつうことをしてくれたんだあいつは… 正真正銘の大怪盗だったんだな…

正直、これからの身の振りに困る礼だったが…

——その感覚は、これまでに味わったことの無い程、甘美で、柔らかだった…

case : ハワイ

File. 15 Summers 14th

俺はJ・マックス。

東京武偵高校に通う普通……ではないが学生、もとい武偵だ。

短い間にめっちゃめっちゃ濃い出来事が多く起こり過ぎて精神が参ってしまった俺は、夏休みに入りようやく落ち着く時間ができた。

てなわけで、俺は長期任務の為にプライベートジェット（自操縦）で移動している。

何で休みたいのに任務を受けてるのか？ ……実はこの任務は少し特殊だな……

内容は、『尽星』の傘下にあるグループのリゾート建設地の警備、というものだ。

尽星と言えば、宇宙開発機関に名を連ねる企業で、過去にその私設部隊がテロ鎮圧にも貢献した結構特殊な事情を持つ処。

育成機関時代に協力した縁で、その頃から依頼を受けていて去年もそうだった。

警備、とはあるものの、実際は建設地であるハワイの別のリゾートを期間中無料で貸し切れる、まさに休みにはもってこいだ。

それで今年も同じように依頼が来たんで、向かっているわけなんだが…… ハア……



事は数週間前、夏休み直前の日。

休み前ということもあり、いつもよりバタバタしている人も多い。

俺は教務科にて依頼の確認を終え、承諾を得たところだった。

「ういー、まあいいんじゃないかねえの?」

「真面目にやってくださいよこんな時くらいは.:.:」

対応してるのは、白昼堂々煙草を吸ってる綴先生。

そりゃあもう、この会話にすら興味が無いって感じで取り敢えず肝心の依頼は通った

ようだ。

「それじゃあ、自分はこれで失礼させていただきます。」

問題のことは、俺が教務科を出ようとした時だ。

（うん? 何かドアの近くに気配が.:.:）

「.:.:つてうおおっ!?!」

突然、ドアが開いて俺を遮るようにアリア嬢と遠山が出てきたのだ。

「その依頼.:. アタシ達も受けるっ!!」

.:. . . . もう、常識じゃ語れないイレギュラーだよこいつは。

と、いかんいかん。問題点はそこじゃないんだ、今はこのわけ分からん事ばかりを言う天才厄介人(??)を何とかせねば。

「おい、アリアじよ… アリア、すまんが既に…」

「あ? いいんじゃないの?」

「…はい? (紅茶刑事)」

ちよおおい待てえええい、先生、先生!! おかしいでしょう?

面白半分で言ってるんなら今すぐ止めて下さい、俺の今後が掛かってるんですよ!?

「…遠山。」

「悪い、ジエイ。今回は俺も何とも言えない、むしろ俺も頼みたい位なんだ。」

「あ、???

これは、俺も予想外だった。遠山の奴、アリア嬢に敷かれた風でもないんだよなあ…

こう言われると俺もなあ… どうすつかなあ…

「…取り敢えず、追記しておいたから。後、よろしくな。」

「はいっ!?!」

最終的には、知らぬ間にそういうことにされてた。ホント、教務科は魔窟だぜ…

結局、依頼に関してはこんな感じになってしまった：

・ハワイ・リゾート建設地、警備

・ランク、学科、問わず

・1人

・単位：3.0 報酬：5000000

請負人 J・マックス

遠山 キンジ (アリアの巻き添えと単位)

神崎・H・アリア (無理矢理参加)

星伽 白雪 (遠山の付属)

峰 理子 (興味本位)

レキ (理由不明)

ジャンヌ・ダルク (行動観察)

鈴木 蜜子 (鈴木・姉) (なんとなく)

間宮 あかり (神崎の付属)

佐々木 志乃 (間宮の付属)

火野 ライカ (間宮達の付き添い)

島 麒麟（火野の付属）

高千穂 麗（間宮目的の線有り？）

愛沢 湯湯・夜夜（高千穂の付き添い）

風魔 陽菜（報酬目当て）

鈴木 桃子（鈴木・妹）（間宮達の観察兼俺の監視）

以上……

付属人が多過ぎるっ!!! てか、いつの間にか人が増えている!!

まあこの際、単位不足だった遠山は良しとしよう。

1年達もしようがないとしよう。

だが、アリア!! 思い付きで、申請出した後から強引に入って来るな! 承諾した教

務科もおかしいが、予定が狂うだろ!?

レキに至っては、いつの間にか面子に入ってたし……

伊・U組は、なんだかんだ来やがるし……

俺の計画が…… 音を立てて崩れていく…… 絶対に碌な事が起こらねえぜ?

ちなみに、武藤も名乗りを上げたのだがコミケの直後に夏風邪になってしまいあえなくリタイアとなった。

・・・まあ、そんなわけで・・・

「おい、大丈夫か？」

「・・・ああ、心配ないさ。(げっそり)」

俺の操縦するプライベートジェットでハワイに向かっている最中だ。

横には、遠山を座らせている。あの中にいるのは、流星に酷のようだ。

「理子っ！ アンタ、まあたイカサマしたわねっ!？」

「あはっ☆ なあーんのことかなあー？ 私はあ、普通に4カードを出したただだよ？

証拠でもあんの？」

「ぐぎぎぎぎっ!!」

「まあ？ どつちにしても、アリアの手持ちもう無いんだけどねえ？（ガン見）」  
「うがあああつ!!!」

「先輩達から見たマックス先輩ってどんな人ですか？」

「……都合のいい人です。」

「うーん…… キンちゃんの友人で、色々な事が出来て、とにかく万能って感じかなあ？」

「そうだな、非常に興味深い男ではあるな。色んな意味で。」

「そ、そうですか……」

（自分で聞いたって何だが、何か…… なあ……）

「ライカお姉様は、どう思ってたらしやるんですかあ？」

「あたし？ そりゃ、尊敬できる先輩って思うさ。なんて言うか、上手く言葉にはできないんだけど、他の男とは違った親しみがあるというか……」

「それなら、戦兄妹の申請はしなかったんですの？」

「勿論しようとは思ったさ。……ただ、最終テストをやつてるところを見て自信を無くしてさ……」

「そんなに恐ろしいものなんですの？」

「恐ろしい、つてよりは”無理ゲー”、か……？」

「ま、それこそジェイの特色がよく出てるからねー☆ それ、フルハウスだぞっ!!」  
 「ま、また 안타ア…」

「・・・”5カード”です。」

「え、え、っ!?!」

「・・・ザンネンだったわねえ? 最後の最後に、ぜえんぶ”横取り”されちゃうなんて?」

「アハハ☆ それ以上変なこと言うとお、ぶっ飛ばしちゃうぞ?」

「上等よ!! 風穴開けてやるわ!!」

・・・おいおい、頼むから俺の機体でぶっ放さないでくれよ?

このジェットは、武器なんかの輸送も兼ねるんでそこそこ大きい造りになってる。

だが、誰だって人様の乗り物で好き勝手されたら嫌になるってもんだ。

後、遠山にも言われたが、なんでこんなもの持つてんのかはあまり気にしないでもらいたい。なんせ、育成機関時代が色々アレなんでね・・・

・・・ちなみに、火野が言っていた戦徒のテストについてだが・・・

俺の場合、簡単な適正確認と幾つかの条件承諾、そして最終テストと称したその日の気分が決まるゲーム対決だ。

特に最後のはついつい本気で相手しちまうから、今までこれをクリアできた奴がいな  
い。

条件に関しても地味に厄介事で、万年「C」と言い続けるように俺と組む際はランク  
に期待はできないということだ。

実質、組んだ時点でランク考査にハンデが出ることは確定で、最悪そのままランク昇  
格せずからの戦徒解消なんてのも普通にあり得る話である。

だから、俺の戦徒になれる奴がいるとすれば、そいつは俺より余程優れているわけで、  
だったら組む必要なんざ無くね？　・・・とも思ってしまうのだ。

ま、俺にとつちやそんなこと至極どうでもいいが。

「お前も苦労してんな。」

「お前に言われちゃお終いだぜ。」

「キンちゃん様、お腹空いてない？　台所みたいな所があつただけど、そ、その…  
キキキ、キンちゃんがよければ…。」

「あー…。」

「……………別にいいけどよ、そんなに量は無いからな？」

「じゃあ…　よろしく頼む…。」

「!!　はいっ!!　待っててね、キンちゃん!!」



「……………」

「お前も苦勞人だなあ？ お？」

「……悪かったよ……」

どこことなく満足した俺は行き先を設定し、オートパイロットに操縦を預けた。

先はまだまだ長い。一眠りする為、アイマスクとヘッドホンで感覚をシャットアウトした。

……どうか、今回こそは何事も無く終わってくれ……（超巨大旗）

着いたぜ。（一般武偵）

「で、デケエ……」

遠山は、これから俺らが過ごすリゾートホテルの規模に驚いているようだ。

1年の（佐々木，高千穂を除いた）奴らも同様。レキは勿論だが貴族育ちのエリア嬢

は特に変わった様子は無い。

「まあ、比較的小規模、つっても普通よりはデカいかもな。」

「これで”小規模”ですか!？」

「ああらあかり、これで驚いていては超高級リゾートを見たら度肝を抜かれますわよ？」

「まっ、これ位普通よね? けど、悪くはないわ!!」

「ご令嬢達は、こういうのが当たり前だからそう思うのも分からなくはない。」

だが、地方出身の間宮にそんな話をしたところで分かるわけ無いだろう…

まあいい。取り敢えず、荷物を運んで挨拶を済ませとかねえと。

「フロントで各自の鍵を受け取れ。俺の名を出せばいい。部屋割りは事前に決めてある  
だろう? 後は、お前らでやってくれ。俺は用事を済ませてくる。」

「分かったわ! ほらキンジ!! 早く持って来なさいっ!!」

「わ、分かってるよ!?! たく… 何でこんなことに…!」

「久しぶりですね。今年もよろしくお願いしますよ。」

「ええ、むしろ今回は大所帯だったのによかったんですか?」

「問題ありません。採算は十分に取れていますからね。」

「そうですか：：　ところで、外にあったピラミッドレプリカは一体？　予定には無かったと記憶してますが：：」

「ええ、本来の”世界情景図モニユメント”には含まれていなかったんですが：：　発注ミスか何かで届いてしまい、上との話し合いの結果、急遽計画に追加したんですよ。」

「はあ：：　なるほど。では、明日から始めていきますんで。」

「はい、改めてよろしくお願ひしますよ。”ホワイトソード”。」

「また、懐かしい名を：：　その名に恥じぬよう、やらせていただきますよ。」

さあて、これから何が起こるやら：：　あいつ等が、厄介事を起こさないことを祈るか：：

Case: Out Side

## File. α 男達の戦場

真夏へと本格的に突入した東京、某所公園の一角——

「うおおおおお…… 何て熱量だ……！ これは、太陽が刻一刻とこの地球近づいていく証拠だぜ……!!」

「そんなことより、今後の予定はどうするんだ？」

「決まってるだろ。今年も俺たちの大金を賭けた戦い、コミケ”夏の陣”の開幕だ。(迫真)」

「やはりか、そうだろうと思っただぜ……」

いつもの3人、タイヤベンチでたむろしていた時、柴田が口走ったことに俺はもう呆れてそれ以上何も言えなかった。

今年も、あの東京で最大級の戦場に行くのか…… 全くこいつも懲りねえな。

というのも、これにはこの時期に武偵校に入ってきた、ある依頼が関係している。

”コミケ代理買い取り”である。内容は至極単純、依頼者の代わりにコミケに赴き目的の物を買って来る、言うなれば”規模のデカイお使い”だ。

勿論、これだけの為に結構な額を出してくる依頼人もいるから、その本気度が窺えるだろう。

理由としてはそれだけじゃなく、諸事情で行きたくても行けなかったりする奴なんかもいる。

だが、分かる人なら分かると思うが、あそこは生半可な気持ちで踏み入っていいところじゃない。

この依頼は内容によって綿密な計画が必要で、それを怠れば絶対に完遂することは不可能だ。

なのにこれを受けようと思うのは…… 言っちゃあ何だが羽振りがいいからだ。

何かと入り用な武偵にとっては、1〜2人分こなせば結構な額になる。

これだけの為に、買い回りを極める奴がいる位だ。

「死ぬ程面倒だが…… 少し懐が厳しいんだよなあ……」

「だろお？ ならやるしかねえぜ。」

「あそこは見ているだけで飽きないからな。やらない理由はねえな。」

まあ、最近の色々あつて収入が欲しかったところでもあるし、やってやるかねえ。

「お、お前ら揃いも揃ってなあにやってんだあ？」

「ん？ おお！ 剛やんに金の字じゃねえか!!」

流れで話をしていた途中に、武藤とそれに続く遠山が来た。相変わらず、遠山のテンションは低い。

「実はだな・・・」

「何だ、お前らもやるつもりなのか？」

「つうことは何か？ お前らも？」

「応よ！ 不知火は予定があつて駄目だったが、遠山に頼んだら快く引き受けてくれたぜ。」

・・・俺は察してしまったよ。あいつ等の内で何があつたかは知らねえが、遠山は決して快く受けたわけではない。

現コミケの参加比率は未だ女性が多くを占めるのに、自殺物の黒歴史を作りに行く依頼を受ける筈無い。

ま、そんなのでもいいがな!!（いつもの）

「ならこれから周回計画立てと洒落込もうと思うが、どうだ？」

「いいねえ、それじゃ有難くご一緒させていただくぜ！」

そんな感じのやり取りをしたのが、夏休み前の2週間前辺り。

「さあ来たぞ：。」 I ☆ K U ☆ S A ” が始まるっ!!」

「いや、おかしいだろ。これから死地に行くって時に、テンション高過ぎだろ：。」

「ふっ、実は今回は依頼とは別に俺個人の狙い目もあるんだよな。」

「は？ お前がか？ 珍しいこともあるもんだな：。」

「永らく新作の情報も出なかった『ドレッドノート刑事』の続編が出る、って情報をキャッチしたからな。」

夏休みに突入した俺らは、「ビッグサイト」こと東京国際展示場を前にして開戦の時を待っている。

駅からも続々と人がなだれ込んできて、開始前から熱気は最高潮。

人間は：。 娯楽を追い求めるあまり、変なところで真の力を発揮するように進化したのだろうか：。？

「よう、お前ら！ 今日、お宝コンプできるように頑張ろうぜ？」

「そういうお前な！ 戦果の確認でまた会おう。」

時間だ。一瞬、辺りが静寂に包まれる。この瞬間の時が止まったように：。

開始の合図を皮切りに、彼らは一斉に動き出す。

『「合戦じゃああああああああ!!!」』

「こいつを2つ、新刊3冊で…」

「ありがとうございます!」

「…次だ。」

とは言え、流石に2回目ともなれば如何に効率的な回り方をするかが分かってくる。

人目の死角を通りつつ、邪魔にならない速い移動法。

目的の物がある程度同じ依頼を選ぶことで、回る量を減らし数人分もこなす。

何より、回るブースの時間帯管理。これが正確かどうかで、回る早さが断然違ってくる。

しかし、今年はブースの位置が少し変わったからか、予想よりも早くに今日のノルマは達成出来た。

「ふう、こんなもんか。」

「ええ〜? こつちのからはあ、何にも買ってくれないのおー?」



・・・聞き間違いだろうか？ めちゃめちゃ、身近に居る奴の声にそっくりだ。

だが、騙されるなよJ・マックス。変声術の例にもれず、こいつも別人の可能性は高い。

「1人でこんなことに来るなんて珍しいよねえ？ ひよつとして、オタクデートつすか!?!」

「んな訳あるか！ ボケツ!! 依頼であいつ等と来ただけだ！ あと、俺にデートするような相手は居ねえ!!!」

「あつ・・・（察し） ご愁傷様です。」  
「大きなお世話だつ!!!」

つつい口が出てしまった・・・ ああ、こいつは間違いなく峰 理子だ。

だが、俺が最も驚愕したのが理子のいたブース全体だ。出してる同人誌の前に、堂々と夾竹桃もとい鈴木 桃子が座っていたのだ。

しかも、出してる表紙に『クリスチーネ桃子』なるネームがあることから、これを書いたのが紛れもなく鈴木・妹であることが分かる。

あ、ありえん・・・（MIZUTTI） 戦闘組織に属していた毒女が、よりにもよってこんなものを!!

よくよくそれを見てみれば、内容は女同士、所謂「百合」物なのだが・・・

その登場人物達が、明らかに見覚えのある奴らに激似な容姿をしている。

ううむ、間違いない。こいつ等、絶対にあいつ等だよな？ 偶然なのか？ いや、マ

ジで描いたのか?!

「全く、騒がしいわね。」

「すいませんねえ、お宅のキャバ嬢が随分と面白いことを言ってきたもんで…（静かなる怒り）」

「そう… 用が無いなら、さっさと戻ったらどうかしら?」

「ああ、そうするさ。ただ、1つ聞きたい。」

「何かしら? これに関しては、司法取引の条件として提示しただけの話だけ?」

「いや、そういう訳じゃ無いが… それもかなり気になる話じゃあるが…」

確かに気にはなる。むしろ、それを条件に出すのか? そんなに大事なのか?

…つと疑問を挙げたらキリが無くなるが…

それよりも今物凄く気になってしょうがないのが、理子と同じくブースに立っている客寄せであろうジャンヌのことだ。

「…ん? どうした、何を見ている?」

いや、お前の着ているコスがだな… どつかの王のそれまんまじゃねえか。ご丁寧

に、1本角（比喻）までつけやがって…

大体お前、魔剣じゃねえか。魔剣と聖剣じゃ名前に真逆だろ、アレか？ 光と闇を併せ持つハイブリッド聖騎士か何かか？

つーか、ジャンヌ・ダルクでいけばよかったじゃねえか。オルタ的な奴で、昨今の人氣にあやかれるし。

色々、ツツコミどころ満載だが、第1に思うのは…

「お前… それでいいのか？（BRNTさん）」

「?? 何か問題があるか？ 覚えたフリもかなり好評だったぞ？ こんな感じに、エクスツ!!!」

「だあー！ 待て待てっ!! 止めろ馬鹿っ!!!」

おい、阿保か!? 唯でさえ、色々、アレなんだよ!! 描写的にはアレだが、分かる奴には格好のネタなんだよ!!!（メメタア!）

いや、この一文もすげえネタだけども!!!（メメタア!!）

ご先祖様を大事にしろよ…

「彼女達には伊・U時代から手伝ってもらってるから。」

「…何だつてえ？」

伊・U時代から？ どんだけだよ、衝撃の事実だわマジで。別の方向でも普通じゃ無かったわ。

理子にしてもそうだし、水蜜桃は性格からしてもうおかしい。

あ？ そう考えると、まともと言えるのはジャンヌなのでは？ いや、あの王のコス  
を着てる時点で彼女も同類か…（偏見）

てか、俺は一体何をやってんだ… 完全にキャラを見失ってたんだが？

「……………もう戻るわ…」

「そう、気が向いたら見に来なさい。」

「それを俺に言うのかあ？ ……分かったよ。」

「まったねえ!!」

「ではな。再び交える時は、マスターとしてだな。」

「お前、最後までそれで行くのか？」

結局、買うもの買ったらすぐに退散したが… 何だろうか、物凄い精神疲労が感じられる。

「よう、柴田よ。お目当てのモンは手に入ったか？」

「……………」

夕方頃、会場から離れた広場にて成果を確認しあう為に集まっていた俺らは、お互い喉を潤しながら座りほうけていた。

会場から帰って来た俺達の姿は、さながら帰還兵のような雰囲気を出していただろう。

取り敢えず、今回のノルマは全員達していたのが幸いと言うべきか……

……ただ、今回一番意気込んで任務に望んでいた柴田は狙っていた新作を手に入れられなかったようだ。

そのサークルは、今日のみ参加の限定的な奴だったようで、今日を逃してしまったことで入手の目途は断たれてしまったのだ。

本人も、絶対に手にする感じていたにも関わらず駄目だったことが相当堪えたらしく、その姿は言うなら正しく“どんより”である。

しかたのない奴だ……

「おい、柴田。」

「何だよ…… !!? お、前…… それは、『ドレッドノート刑事 MAXIMUM 03』

!! な、何で…」

「さあな、偶々だ。こいつをやるから、とつと戻れ。」

「あ、ありがとううううううう!!! ジェイ、お前は本当にいい奴だ! この恩は一生忘れん!!」

全く気のいい奴だ…

本当は、件のブースにて動きが早かったこともあり、あいつが行く頃には既に完売している可能性があると考えしていたからだ。

予想通りの展開に内心呆れつつ、気変わりの早さに更に呆れていた。(2乗計算)

「どうだった、遠山。この、糞みたいな地獄の戦場は?」

「…2度とやりたくは無い…」

そりやそうだろうな。今回の遠山は、見事、あの状態にならずに会場から帰還した。

唯でさえ人口密度がヤバいあそこから、無傷(精神は除く)で戻つてこれたのは称賛に値する。

そういう意味では、こいつも成長してんだな。(ベクトル違い)

「ともあれ、今日の目的は達した。明日に備えて、早く休もうぜ。」

「そうだな… よし、今日は解散だ。」

若干1人を除き、御通夜状態を垂れ流しにするのもあれなんで、早々に解散にしてその日は帰宅することにした。

これが、後2日である。いくら高額報酬とは言え、ああ… 何とも…

帰り際の1本道、暗闇を『カカオブラック』片手に歩いて帰る。辺りに人影は見られない。

…前にも同じ場面があったな… デジャブか？

だが、今の俺は研ぎ澄まされた感覚で気配を察知できるし、戦う術もある、あの時とは違う。

「同じ結末にはしねえぜ…」

「そうだといいわね。」

「うおっ!!? …… 夾竹桃?」

…と思うていたんだが、近くにいた彼女に気づけんようじや駄目だよな…

何でいるんだよ…… へタしたらあの時以上の恐怖になるかもしれないねえぞ……

元が恐るべき戦闘集団に所属する毒女なんだよ、包丁野郎とは別の怖さがあるわ……

「あいつ等はもうしたんだよ？」

「先に帰ったわ。明日も出るし。」

「あ、ああ。そうか……」

……

沈黙、はつきり言う俺はこいつが”かなり”苦手だ。

単純に、分からないんだ。今この時も。何故こいつは俺に語り掛けてくる？

初めて会った時から、それは全く変わっていない。まあ、今日は衝撃の側面を見た  
が……

「……」

「……私はね、今までありとあらゆる毒を集めたのよ。」

「……あ？」

「この世で、私が知らない毒があることが許せなくてね。そんな時に、見つけたのよ。間

宮の秘毒を……」

「間宮……」

（そう言えば、こいつを逮捕したのは間宮 あたりだったな。あいつがあそこにいた目



的は、間宮だったのか……)

「彼女の妹の命を人質に間宮の秘毒を、ひいては間宮 あかりを伊・Uに引き入れようとしたわ。」

「惨いな…… 身内の命が懸かるとなつては、そう簡単には見過ごせない。」

「そう…… 本来に順調に行つていたのよ、その時までね……」

……そうか、こいつは自らの欲望の為に手段を問わない奴だったのか。

だからこそ、他人の命すら平気で葬れる、へタをすれば俺はあの時本当に死んでいてもおかしくなかった。

「けど違ったのよ……」

「違った？」

「間宮の秘毒と思つていたもの『鷹捲』は、毒では無かつた。」

なるほど…… 未知の物を追い続けた末、それが自身の作り出した幻想だったことを知つたのか。

よくある話だ。欲する物を思うがばかりにその幻を作り出す、必死で追い求めた果てに辿り着いた真実で打ちのめされる。

それを、こいつも知つたのだ。

「……何故、それを俺に話した？」

「さあ？ どうしてかしらね…」

ますます謎だ。特殊過ぎるこいつが、俺に興味を持っているのが不思議でしかたない。

考える、だが俺に女心というのは微塵も理解できない。というか、俺に限らずほとんどはそうだろう。

そんな俺を余所に、夾竹桃はさつきまで「俺が持っていた」カカオブラックを手を離れていく。

「おいっ！ そいつは俺のだぞ!!」

「また明日、暇があれば来なさい。」

・・・本当に、不思議な奴だ。

未だ消えない苦みの余韻を噛みしめながら、呆然と彼女の背が消えて行くのを見ていた…

余談だが、彼女の年齢は生前の俺よりも1つ上だったようで、姉に至っては3つも上らしい…

人は見かけによらんと、思い知らされた。

## File. β Steel Field

画面の前にいる奴らは、どんなゲームをやってきた？

俺は、生前は専らソロでアクションゲーを極めていた。

しかし、この世界に来てリアル戦友（言葉通り）ができてからはオンラインFPSも嗜むようになった。

特に、『Steel Field』シリーズは柴田・でんごろうとよく部隊を組んでい

る。  
最近は新作の『Steel Field V』が話題に上がっているが、俺らはそんなことは関係無しに『Steel Field III』で戦っている。

約3年前に売りに出されたものだが、未だ古参勢も数多く戦っている。

かく言う俺も、その古参勢の1人でランクは鷲（大佐）60。全兵科のアンロック解除済み。

ちなみに柴田とでんごろうも、全アンロック解除している。

・・・何でこんな話をしてるのか、それはある休日の俺の自宅での話まで遡る。

この日は、柴田・でんごろうの2人を呼んで連戦と洒落込もうとしていたんだが、2人が家に来るまでの道中で偶然に会った遠山・武藤の2人も連れて来たのだ。

実は武藤もStFⅢプレイヤーで、フレンドだったこともありチームを組むことも少なくなかった。

どうやら、ゲーム経験有りの遠山をStFⅢデビューさせて初心者狩りしようという魂胆の様だった。

だが、そこはやはり遠山だ。居るだけで、厄介事を引き寄せてくる男。(超絶巨大ブルーメン)

何処からか、あいつ等をつけていたらしいアリア嬢がいきなり押しかけて来たのだ。詳しい内容は端折るが、色々あって初心者2人を指導しなきゃいけなくなかった。

遠山はまだマシンだろうが、アリア嬢を教えるのは骨が折れかけたぜ。(ガチ)で、その後改めてマルチ戦をやりたいと言い出したので、新たに3人も加えやることになって現在に至るのだった。

【Steel FieldⅢ】 room matching . .

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| r | r | r | r | r |
| o | o | o | o | o |
| o | o | o | o | o |
| m | m | m | m | m |
|   |   |   |   |   |
| I | I | I | I | I |
| N | N | N | N | N |
| : | : | : | : | : |
| T | M | D | M | I |
| o | u | o | r | N |
|   |   |   |   |   |
| y | t | c | d | I |
| a | o | t | r | T |
|   | v | . |   | A |
| ^ | g | 米 |   | L |
| e | b | 村 |   |   |
| O | ? |   |   | J |
| d | d | p |   |   |
|   |   | y |   | 3 |
|   |   | d |   | 7 |
|   |   | @ |   | 5 |
|   |   | ( |   | 6 |
|   |   | 4 |   | 4 |
|   |   | e |   |   |
|   |   | d |   |   |
|   |   |   |   |   |
| @ |   |   |   |   |
| g |   |   |   |   |
| ) |   |   |   |   |

INITIAL・J | 37564 : おはよう諸君

Mr. Dragon | 1192296 : おはよう

Doctor. 米村 | pyd@) 4ed : おはようさん

Mutou | vgb?d : ようお前ら!! おはよう!!

To | yama | ^eOd (g@) : おはよう

INITIAL・J | 37564 : ”Mutou | vgb?d” 朝つばらから頼い

ぞ 今回はAria嬢達のNob卒業試合なんだから お前のテンションに最後までは付き合つてやれん

Mutou | vgb?d : いいじゃねえか こういうのは気持ちの問題だぜ?

INITIAL・J | 37564 : だつたらちやんと仕事しろよ ジープ特攻丸さ

んよお

Mr. Dragon | 1192296 : まあ、俺達はいつも通りにやりやいいんだ

ろ?

INITIAL・J | 37564 : ああ、今回はラツシユの防衛側で出る ”To

| yama | ^eOd (g@) ”達は攻撃側だ

Doctor. 米村 | pyd@) 4ed : コンクエストとかじゃないのか?

INITIAL・J | 37564 : 何となくこっちの方がアレだと思ったんでな

To | yama | ^ eOd (g@ : アレって何だよ

Mr. Dragon | 1192296 : それより”To | yama | ^ eOd (g

@” 戦争ゲーで”平和主義”ておまつ

Doctor. 米村 | pyd@) 4ed : この鯖は強襲科みたいなどござ

ル無し貢献はほぼ無理だ

To | yama | ^ eOd (g@ : うるせえな

Mutou | vgb?d : ”To | yama | ^ eOd (g@!!” 突撃兵なら突つ

込んで死んで行けばいいのに何で援護兵なんだ!

INITIAL・J | 37564 : 突撃兵だからと無駄死にするのはNGだ

room IN : Riko | senjonoidol

room IN : Reki | 0000

room IN : THE・30th | Jeanne

room IN : ARIA | H | Kanzaki

INITIAL・J | 37564 : あいつ等も入って来たな



Doctor. 米村 | pyd@ ) 4ed : 随分苦労してたみたいだな ”ARIA  
H | Kanzaki” さんは

INITIAL · J | 37564 : 鯖を間違えつから今回も内心はアレだった

ARIA | H | Kanzaki : アレって何なのよ！ アレって！！

INITIAL · J | 37564 : さあて、面子の集まったことだしそろそろ開始  
の時間だ

ARIA | H | Kanzaki : 無視するなあ!!!

INITIAL · J | 37564 : さつきも話したが、ルールはラツシュ 攻撃側

は最終破壊地点を爆破すること 防衛側は攻撃を防ぎきれば勝利となる

THE · 30th | Jeanne : ルールの関係上、攻撃側は待ち伏せ前提で目標  
地点に行かねばならない チームワークが重要だ 全員、私について来い!!

Gerald | Ford : Yes Sir

10kouhai | 114514 : ”THE · 30th | Jeanne” 男らし  
いっすね

THE · 30th | Jeanne : 私は女だ

10kouhai | 114514 : ファッ!? ウーン

INITIAL · J | 37564 : さあ、始まるぞ

1  
2  
3

目標を破壊せよ

目標を防衛せよ

Mr. Dragon 1192296 : よし! 早速前線作りだ

INITIAL・J 37564 : 無線を置く 工兵になる間は任せたぞ

Mutou vgb?d : そんなすぐにながってくるわけ無いだろ あつちはまだ

バギー無いんだぜ?

凸KING teiou : ワハハハハッ!!! YU☆KU☆ZO

Reki 0000 [S]VD [ > ]凸KING teiou

M u t o u | v g b ? d : 嘘だろ？

I N I T I A L · J | 3 7 5 6 4 : 天才狙撃手に気をつける ゲームの中でも目の  
良さにビビらされた

D o c t o r . 米村 | p y d @ ) 4 e d : ははっ 迂闊に出られないな さっきの  
奴思いつ切りヘッドだったぞ

M r . D r a g o n | 1 1 9 2 2 9 6 : 他の奴もフラグ投げて牽制してるな

D i s e n p a i | 1 1 4 5 1 4 : ハイじゃMAV出せ

1 0 k o u h a i | 1 1 4 5 1 4 : ウン おかのした

M r . D r a g o n | 1 1 9 2 2 9 6 : さーて 奴さん達のお出まじだ 盛大に迎  
えてやろうぜ

I N I T I A L · J | 3 7 5 6 4 [M4] > h i s a k u n i | G 1 5

I N I T I A L · J | 3 7 5 6 4 [M4] > 4 8 9 2 1 8 5 9 | M I A J I 0 9

D o c t o r . 米村 | p y d @ ) 4 e d [M249] > h e l i o | 5 0 0 0 V

M u t o u | v g b ? d [S C A R | H ] > m i y a m a h t i | 2 3 4 3 0 9

u 9 l

M r . D r a g o n | 1 1 9 2 2 9 6 [A E K | 9 7 1 ] > 4 8 k e i o 9 0 i

| s u s u k i

n a o k i | K M R [ F 2 0 0 0 ] &gt; A R I A | H | K a n z a k i

M r . D r a g o n | 1 1 9 2 2 9 6 [ A E K | 9 7 1 ] &gt; L o n g | g a t e

3 4

D o c t o r . 米村 | p y d @ ) 4 e d : 結構来たな

M r . D r a g o n | 1 1 9 2 2 9 6 : 先にこつち落としたいんだろ? 位置的に

も最初の難関だ

D o c t o r . 米村 | p y d @ ) 4 e d : だといんだがな それよりもよお

T o n o | 1 1 4 5 1 4 [ M 3 9 E M R ] &gt; A R I A | H | K a n z a k i

i s u t n d e r | k a m e o k a [ M T A R | 2 1 ] &gt; A R I A | H | K a n

z a k i

G e o r g e | 2 0 0 8 B [ A S V A L ] &gt; A R I A | H | K a n z a k i

c o o l e g u n | M A X I M U M [ P K P ペチエネグ ] &gt; A R I A | H | K

a n z a k i

糞 | k u s o : 死にスギイ!!

I N I T I A L : J | 3 7 5 6 4 : " T o | y a m a | ^ e 0 d ( g @ " あいつ遂  
に投げやがったな

D o c t o r . 米村 | p y d @ ) 4 e d : まあ、無理だろアレは 多分完全に入っ  
てるっばいぞ

7 7 4 4 5 4 0 G H | I n o k i 「M 6 7 破片手榴弾」 > A R I A | H | K a n

z a k i

D o c t o r . 米村 | p y d @ ) 4 e d : a

M u t o u | v g b ? d : 今のつて完全に事故だよな?

M r . D r a g o n | 1 1 9 2 2 9 6 : ああ、" A R I A | H | K a n z a k i "

が来たところに投げ込まれたから普通に事故だ

A R I A | H | K a n z a k i : に、や、あ、ああああ!!!

T o | y a m a | ^ e 0 d ( g @ : 落ち着け! " A R I A | H | K a n z a k i

"!!!?

A R I A | H | K a n z a k i : 絶対風穴開けてやる!!!

karaka | zoy?!?!  
 [M9] > ARIA | H | Kanzaki

Father | Beast : あー、もう、めちやくちやだよ (憤怒)

Riko | senjonoaidol : さあーお前たち！ 私の為にドンドン死んで  
 だけえ☆

萌豚 | 30 : ブヒー！ ブヒー！

EE409 | Dobuニキ : キャラは男なんだよなあ…

INITIAL · J | 37564 : 大体お前 戦場アイドルってどこ目指してんだ

Riko | senjonoaidol : ふっふっふ 私は派手に活躍せざるもできる

サポートとして極めるのですっ!!

INITIAL · J | 37564 : ” Riko | senjonoaidol ” メトロ

ボマーでスコア稼ぎしてんの知ってっからな

Riko | senjonoaidol : 芸術は爆発だっ!! (ドヤア)

洗車男 | 114514 : D I D R 兄貴オツスオツス

INITIAL · J | 37564 [RPG | 7] > 洗車男 | 114514

Disenpai | 114514 : よっし、じゃあぶち込んでやるぜ あっ (死亡)  
 10kouhai | 114514 : 蘇生、いいっすかあ? ンアツー!?!?

Reki | 0000 [SVD] > Disenpai | 114514  
 Reki | 0000 [SVD] > 10kouhai | 114514

merabyu | 38ejw2i8OI : おい” Reki | 0000” て奴マジで  
 スゲエぞ

3000GB | GIGANET : ” Reki | 0000” あんだけ遠くからめっ  
 ちやキル取ってる奴、初めて見たわ

Raleigh | BB34918 : ” Reki | 0000” Great

Reki | 0000 [SVD] > merabyu | 38ejw2i8OI

Reki | 0000 [SVD] > 3000GB | GIGANET

Reki | 0000 [SVD] > Raleigh | BB34918

Doctor. 米村 | pyd@ | 4ed : そら、弁当の時間だ  
 Moutou | vgb?d : 悪い！ 丁度無くなってきたとこだ  
 Mr. Dragon | 1192296 : しつかし動きが無いなあ このまま勝ちも  
 あるぞ？

目標Bに爆弾が設置されました

Moutou | vgb?d : 何い!! 防衛部隊は何やってた！

THE·30th | Jeanne : はははっ！ 私の作戦通りだ!! このまま目標  
 を破壊する!!!

Moutou | vgb?d : い、いつの間!? さつきから姿が見えなかったが  
 つて、あ.:

THE·30th | Jeanne [ナイフ] > taityou | DAAAA  
 THE·30th | Jeanne [ナイフ] > ZERO | DAAAA  
 THE·30th | Jeanne [ナイフ] > omarle | bu8DI109



Mr. Dragon | 1192296 : やべえ 部隊長がこっちの迎撃に駆り出されてる内に入られてる

strion | MA50 : き、気づかんかった

目標Bが破壊されました

INITIAL : J | 37564 : あいつ、画面の前でめっちゃドヤツてるぞゼツ  
テエに

Mr. Dragon | 1192296 : そんなことよりマズいぞ!! 奴ら一気に押しかけて来やがった、追いつかねえ!!?

Riko | senjonooidol : お届け物でえーす!!!

INITIAL : J | 37564 : ん? C4爆撃だつ! 回避!!

Riko | senjonooidol [C4爆弾] > Mutou | vgb?.d

Riko | senjonooidol [C4爆弾] > Mr. Dragon | 119

2296

Riko | senjonooidol [C4爆弾] > Doctor. | 米村 | pyd

@) 4ed

R i k o | s e n j o n o i d o l [C4爆弾] > 56so | 367

I N I T I A L · J | 37564 : だあめだこりやあ

その後、何だかんだとあつたが戦闘は最終目標地点までもつれ込んだ。

T o | y a m a | ^ e O d (g@ : 俺、マジで必要なくないか？

M u t o u | v g b ? d : ” T o | y a m a | ^ e O d (g@ ” お前まだいたのか  
 ? てつきりもういないかと思つてたぞ

D E K A | P I N 5 5 5 5 : キル無しデス無し芋り恥ずかしくないのかよお

V A N | D ♂ D ♂ F : ” T o | y a m a | ^ e O d (g@ ” を殺せ

B i l l y | t h e | b o o t : H e y かまわん 殺すぞ

Mr. Dragon | 1192296 : 待てえーい!? お前らそつちに戦力を割く  
んじやない!!!

目標Aが破壊されました

Mr. Dragon | 1192296 : うあつ!?

Doctor. 米村 | pyd@)4ed : とうとう最後の砦になつちまつたな

INITIAL · J | 37564 : だが、チケツトも残り少ない このまま行けば  
勝てる見込みはある

Mutou | vgb?d : だったらやってやるぜ!! うおおおおお!!

ZEESE | 43984jrj : 何っ!?

Doctor. 米村 | pyd@)4ed : 轢いてやるぜええ!!

Mutou | vgb?d 「バギー」 > Amada | j448gJvO

Doctor. 米村 | pyd@)4ed 「C4爆弾」 > smart | piyt45

2  
1

Doctor. 米村 | pyd@)4ed 「C4爆弾」 > M32IE34 | TITA

N

Doctor. 米村 | pyd@ | 4ed [C4爆弾] > pizaderiy漢 | c  
 ummingskey

Doctor. 米村 | pyd@ | 4ed [C4爆弾] > ZEZEs | 43984j  
 rj

naoki | KMR : え... ?

Doctor. 米村 | pyd@ | 4ed : . . . 隙があれば、マルチキルも狙いど  
 ころだろ？

Mr. Dragon | 1192296 : 抜かり無いな... :

INITIAL : J | 37564 [RPG-7] > Reki | 0000

INITIAL : J | 37564 : よし!! ” Reki | 0000 ” 抑えたぞっ！

Mr. Dragon | 1192296 : よく倒せたな

INITIAL : J | 37564 : 十八番の跳弾射撃とかが無い分、強引に押し切  
 れば倒せる

Reki | 0000 : やられました

To | yama | ^ e 0 d ( g @ : いやいや、お前どれだけ倒したと思ってるんだ？ スコアじゃ断トツトツプだからな？

Mutou | v g b ? d : ” To | yama | ^ e 0 d ( g @ ” まだ生きてやがったか!!

To | yama | ^ e 0 d ( g @ : 何だよお前ら... 何でそんなに俺を狙うんだ!?

Doctor | 米村 | pyd @ ) 4 e d : そりや貢献してねえしぶとい糞芋が生き続けているのがいけねえなあ？

To | yama | ^ e 0 d ( g @ : んなこと知るかつ！  
kinbary | 3897290088 : 居たぞおおおお!!!

laser 兄貴 | clone : 性偽の刃覚悟しろ

To | yama | ^ e 0 d ( g @ : うわっ!! 見つけた!!

Mr. Dragon | 1192296 : ええい！ しつかりしろお前らっ!! 敵のチケツトはあと4だ!!

ARIA | Kanzaki : 貰ったあああ!!!

Mr. Dragon | 1192296 : 何っ!!?

2296  
 ARIA|H|Kanzaki [AUG A3] > Mr. Dragon|119

ARIA|H|Kanzaki [M1911] > 4t4wfji|Beste r

ARIA|H|Kanzaki: やった! よーし、このまま ぎゃあ!?

ki  
 Doctor. 米村|pyd@)4ed [C4爆弾] > ARIA|H|Kanza

Doctor. 米村|pyd@)4ed: 目標に爆弾設置は常套手段だろ?

Mutou|vgb?d: さすがだな! クソツ! だが、これであと3人d

Riko|senjono idol: 死ね

THE·30th|Jeanne: 死ねえ!!

Mutou|vgb?d: ってうおおおおお!!!

Riko|senjono idol [DAO|12] > kusodebu|60

9 MEN

THE・30th | Jeanne [ナイフ] > Mutou | vgb?.d  
 Riko | senjono idol [DAO | 12] > Doctor. 米村 | p  
 yd@) 4ed

Riko | senjono idol : よし 後は目標の破壊だけ

THE・30th | Jeanne : おい” Riko | senjono idol ”あ

れは私のタグだぞ!!

Riko | senjono idol : うるさいなあ!! 勝てればいいのさ!!!

INITIAL・J | 37564 : 2人揃ってそこで寝てろっ!!

INITIAL・J | 37564 [RPG | 7] > THE・30th | Jeann

e  
 INITIAL・J | 37564 [RPG | 7] > Riko | senjono id

o  
 l

INITIAL・J | 37564 : あと1枚 : : 今俺1人かよ

ARRIAH | Kanzaki : "INITIAL · J | 37564"!! 決着をつ  
けるわよっ!!!

INITIAL · J | 37564 : 最後がお前になるとはな

ARRIAH | Kanzaki : 最高の展開じゃない?

INITIAL · J | 37564 : ふっ、行くぜ!!! おおおおおお!!!

ARRIAH | Kanzaki : はああああ!!!

BO☆KU | HI☆DE 「クレイモア地雷」 > Toyama、eod)g@

ARRIAH | Kanzaki : えっ?

INITIAL · J | 37564 :



NS:チケット「0」—OW:目標「7/8」

あなたのチームの負けです！—あなたのチームの勝ちです！

.....

INITIAL・J | 37564 : HIDE死ね

糞 | kuso : HIDE死ね

Riko | senjono idol : HIDE死ね

Raleigh | BB34918 : HIDE die

萌豚 | 30 : HIDE死ね

洗車男 | 114514 : HIDE死ね

ARIA | H | Kanzaki : 死ね

BO☆KU | HI☆DE : あゝあゝあゝあああああもうやだあゝあゝあああ!!!

room OUT : BO☆KU | HI☆DE

何とも締まらないラストになっちゃったが、とりあえずアリア嬢は満足したみたいだ。

終わってみれば大接戦。俺も久々に熱くなっちゃったぜ。

・・・今日はこれで終わりだな。すげえ疲れたぜ。

r o o m    O U T :    I N I T I A L ・ J | 3 7 5 6 4

ちなみに、レキのスコアは防衛側1位の俺の約2倍位あった。